



SUAC

静岡文化芸術大学創立10周年記念誌



SUAC

ふりかえれば
未来



ふりかえれば未来
SUAC10

Shizuoka University of Art and Culture 10th Anniversary

静岡文化芸術大学は、実務型の人材の養成と、地域に貢献する大学であることを設置理念として、2000年4月に開学しました。これまでの10年間を振り返り、本学の発展を御支援いただいた皆様に感謝するとともに、これからの本学が果たすべき役割を広く発信し、さらなる発展を目指します。

ふりかえれば
未来

題字:学長 熊倉功夫
題字の「ふりかえれば未来」は、故・木村尚三郎初代学長の随筆集のタイトルです。「この10年を振り返り、未来に活かしていく」という意味が込められています。



ふりかえれば未来
SUAC10

創立10周年記念事業
キャンペーンロゴマーク

制作者:
デザイン学部生産造形学科4年
關悠里さん

10周年を示す「十」の字を、上下左右に伸びる矢印をモチーフに制作しました。10年間に様々な方向に成長してきたSUACのこれまでの歩みと、伸びゆく未来を表現しました。

C o n t e n t s

03	10周年記念鼎談
07	静岡県知事あいさつ
09	SUAC10年の歩み
23	卒業生が語るSUACへの想い
27	今後の展望
	・対談 : 文化政策
	・インタビュー: ユニバーサルデザイン
	・対談 : アートマネジメント
	・対談 : 多文化共生
	・対談 : デザイン
	・対談 : まちづくり
39	浜松市長が寄せる期待
40	地域が寄せる期待
42	在学生が語るSUACへの想い
45	10年の軌跡

A colloquy on the ten-year anniversary



有馬朗人
静岡文化芸術大学理事長
元文部大臣
元東京大学総長



熊倉功夫
静岡文化芸術大学学長
国立民族学博物館名誉教授
元筑波大学教授



松井孝典
静岡文化芸術大学理事
千葉工業大学惑星探査研究センター所長
東京大学名誉教授

大学と学生の印象

熊倉 2010年に本学は10周年を迎えることとなりました。まず、本学の率直な印象についてお聞かせください。

有馬 今年の4月から理事長となって頻繁に足を運ぶようになって、まず学生の皆さんが非常に明るくてハキハキしているなど思いましたね。あいさつもしっかりしてくれるし。これはこの大学の特徴でもあるんでしょう。非常に家庭的な雰囲気、規模が大きいわけではないけど、でも丁度良い人数と言いますかね。“浜松らしい大学”という印象を持ちました。

松井 私も公開講座などで何度かお邪魔させていただきましたが、最初は「そもそも文化芸術大学って何なんだ?」という感じでしたね(笑)。それでもキャンパスの雰囲気や学生たちの顔、履修科目や教授たちを見ていると「文化芸術という枠組みの大学」という独特なカテゴリーの中でその重要性や必要性を認識することができました。

熊倉 学生に関していうと、一方で「まだ幼いな」というか、昔の学生のイメージとはだいぶ違いますよね。服装ひとつとっても、街中で歩いている若者と変わらない。でも昔は、例えば渋谷なんかへ遊びに行く時と、キャンパスの中で過ごしている時とでは、同じ学生でも、雰囲気というか、ちょっ

とイメージが異なっていましたけどね。

有馬 それは平成になってからの話ですね。平成元年の頃はまだ、18歳人口の4人に1人くらいだったんですよ、大学生って。それが今では2人に1人ですからね。それともひとつ感じることは、女子学生のパーセンテージがすごく多くなったということ。特に本学の学生は75%が女子ですよ。これは大きな特徴ですよ。そしてもうひとつは、浜松出身の学生がすごく多いということ。これが「家庭的な雰囲気」を構築させているのではと思います。

松井 その通りですが、その「家庭的な雰囲気」というのにも良い面と悪い面があります。私は今日、たまたまインドから帰ってきたばかりなのでこんな格好で失礼します(笑)。中国とかインドとかの大学に行くと、日本との違いに驚きます。圧倒的に違うのは、学生一人ひとりのアグレッシブさ。目の輝きなんか全然違います。どの学生を見ても「これから俺たちが国を作っていくんだ! そのために大学に来ているんだ!」っていうオーラが露骨に出ていますから。そういうのを見てしまうと、穏やかな雰囲気というのが手放して良いことだとは思えないですね。

熊倉 「草食系男子」と呼ばれる男子が増えてきているように、どこか「元気がない

なあ」「おとなしいなあ」とは思いますね。これも良い面と悪い面があるのでしょうか、それだけ日本が満ち足りた成熟した社会になったという証拠なんじゃないかね。

松井 そうなんですけど、本当はね、学問の世界というのは基本的にグローバルスタンダードでなければいけないんです。日本だけで閉じてやっても意味がない。世界と勝負しなければいけないんですから。そういう意味では、日本の満ち足りた現状や風土に甘んじて、その中で「これで良いんだ」で終わってはいけません。今回、本学が新しいスタートを切る出発点としても、もっと地域と一体化して、もっとグローバルに、そしてアグレッシブに、新しい学問の世界を作っていくってほしいですね。

デザインと文化の可能性、世界を見据えた教育

熊倉 本学が掲げている「文化」「芸術」というのは、戦後の技術革新・高度経済成長の枠でいえば、比較的等閑視されてきた分野です。ただ、これからの時代は、現行の科学が前面に打ち出している“鮮明”なものではなく、“流用ができない”文化価値を含む“ジャンル”がなくなって大事になるのではと思うのですが、いかがでしょうか?

静岡文化芸術大学の
今後の展望を語る

県立の大学へ移行した静岡文化芸術大学。

これからの大学のあり方、地域での役割、教育方針。

“本学の未来”がここに導かれる。

ふりがなは
未来



この大学は今以上に「開かれた大学」にならなくてはなりません（有馬）

松井 そうだと思います。二元論と要素還元主義に基づいて世界を知ること、をずっとやってきて、そのかなりの部分までわかったんだけど、「結局それらを統合して、全体的に見て何がわかったんだ？」と問われると「ほとんど何もわからなかった」ということがわかったに過ぎない。だから原点に戻って、本質として何が一番重要なのか？という問題をもう一度捉え直していかなければならない。そして、それを捉えることができる学問の代表が「文化」だったり「芸術」だったりするんです。地球環境の問題、文明の問題を考えてみても、私の言葉でいうと「人間圏のあり方をどうデザインするか？」が問われているわけです。その答えは、科学技術や科学だけでは出てこない。デザインや文化と一緒に考えることで、人間圏の内部システムを設計することができるんです。これは、本学だけでなく、日本全国の大学にとっても必要になってくる分野だと思います。

有馬 浜松には「やまいか精神」というのがあって、それが支えてきたのはベンチャーの精神です。浜松で活気を持っている産業は、自動車や楽器、光技術など、どれもベンチャーから産まれたものですね。そしてそれらは、国内より海外での消費の方が遥かに多い。そういった産業を生み出している街の利点をもっと取り入れ、「外国に伸びていかなきゃならないんだぞ」という意識をもっと持っていきたいですね。

熊倉 今年3月の卒業式で卒業生代表謝辞を行ったのが、ブラジル国籍の林くんでした。彼は日本で育って、日本語もネイティブに話せますが、子どもの頃から自分のアイデンティティに違和感を覚えていたそうです。でも、本学で多文化共生という学問に接して、その違和感が氷解したと。

今後はブラジル社会と日本との架け橋になるようなことをしていきたい、という大変すばらしい謝辞でした。まさに、今、松井さんや有馬理事長がおっしゃっていた通り、本学の重要研究のひとつとして、海外に目を向ける、多文化共生への理解を深めるというのがこの大学の特色ですね。

有馬 そうなんです。だから、この大学は今以上に「開かれた大学」にならなくてはなりません。浜松に住む日系ブラジル人たちが「将来どの大学に進もうか？」「どんな道を歩んでいこうか？」と悩む前に、我々が率先して受け入れる体制を示すくらいになりたいですね。本学は、他の大学より



遥かに「外国人が地球の裏側にいるんだ」という意識を持って進んでいくべきです。

◆
これからの日本人学生に必要なこと

松井 多文化共生という視点から言うと、僕が大切だと思うのはやっぱり言葉ですね。英語教育です。特に日本人は「コミュニケーションをしよう」という意欲が足りない。日本人の英語が上達するか否かは、その人が日本語でもよくしゃべれるかどうか？なんです。その点インド人なんかすごいんです。しゃべり出すと止まらないですから（笑）。インド人の英語は正直ひどくて聞き取れませんが、それでも発音とか関係な

くとかくしゃべるんです。それで何となく伝わるんですね。やっぱりコミュニケーションしようという意欲があるから。日本人は「キレイに発音しなきゃ」とか「文法がこうだから」とか余計なことを考えるからダメなんです。伝える内容がなければしゃべれないし、伝えたいことがあればどうにかしてしゃべらざるをえません。「何を伝えたいのか？」を探す場所としても、大学の役割は重要だと思います。

熊倉 おっしゃる通りですね。先日、元国税庁長官の浜本英輔さんが特別講義で来てくださった時に、ギリシャの財政危機についてお話されたのですが、内容は全

然経済の話じゃないんですよ。「今、経済でも科学でもない何かが問われている。学問の枠組が揺らいでいる時、われわれにとって必要とするものは何か？それは一人ひとりが問いかける気持ちの強さだ」と。同じことですね。

松井 先程も言ったように、現在の日本ではアグレッシブさが不足しています。当然、問う力のレベルも下がっている気がしますが。本来は、豊かになる＝問うことができる、ということなんだと思いますが、日本はあくまで物質的な豊かさだけで満足していますからね。

有馬 私はゆとり教育論者なのですが、今の日本は、ゆとり教育批判が強くなり、

時代が求めているのは、文化・芸術という“流用ができない”ジャンル（熊倉）

また教え込み教育へ逆行しているように感じます。ゆとり教育が必要だとする理由というのはいくつかあるのですが、日本では「教育を教える」ことが中心となってしまっていて、自ら問う能力や自分で考える能力、それを応用する力などが弱くなってしまった。そこで「余裕を持たせて自分で考えさせよう」というのが、ゆとり教育につながったのですが、そうしたら、分数のできない大学生が登場したり、「円周率は3」で教えているなんて大嘘がまかり通ってしまっていて、結局また知識型の教育に戻ってしまった。するとまた、問う力や考える力が伸びなくなってしまっていて、結局堂々巡りな



んです。難しいところなんですけどね。

◆
SUACが目指すべき、次の10年に向けての大学像

熊倉 それは本学でも問題になっているところで、「一日も早く専門的に通用する人材育成をしたい」と思う一方で「まず基礎教養をじっくり学んで、それから本人が自分のテーマを見つける方が良さだろう」という意見もある。科目はこれを選択して、これだけ単位が取れば、どういうところに就職できる、というようなモデルコースを作った方がいいという意見もあるし、そんな履修モデルはやめて、じっくりキャリアを積もうという方針が良いのか……。



松井 両方あるべきだと思います。旧来の大学としての役割を持ちつつ、専門学校的な部分も取り込む。上手くバランスを取っていかなければいけないところですね。僕の考えを言わせてもらおうと、まずは高等学校の内容を徹底的に復習するのはいかがでしょうか。セミナー形式でもいいので。同時に日本語の作文力と構成力を身に付けてほしいですね。一般的な読解力はもちろん、専門的な分析力を身に付けさせるためには、とにかく本をたくさん読ませることが大切です。読解力や分析力、構成力はいずれも、先程のコミュニケーション能力に直結します。大事なこと、伝

で主体性を認めて、好奇心を持ち、疑問を持つこと。江戸時代から続く日本の伝統的な教育というのは「知る・繰り返す・悟る」なんです。たとえ訳がわからないことでも、強制的に繰り返して、体が覚えるまで本人が自覚するまで続ける。そういう教育も今の日本では意外と必要なんじゃないかと思います。日本が戦後このような国になったのは、大学と専門学校が上手く融合した独自の大学制度ができたからだと思います。しかし今は、このシステムをもう一度考え直さなければいけない時期にきているんだと思います。

松井 日本の大学というのはどこも横並びで、それぞれの特色が感じられません。そんな状況だからこそ、本学はより地域に根ざした大学、地域ととことん関係を持ち、地元の企業や都市のデザインにもどんどん携わっていくような、新しい大学のカタチ、システムを構築していくべきだと思います。浜松という地域はスケールもちょうど良いですし、今後「本学がデザインするもの」に沿って技術革新をしていかないと、この地域は繁栄しないぞ」というくらいの気持ちで発展していってほしいなと思います。



学問の世界というのは基本的にグローバルスタンダードでなければいけない（松井）



静岡文化芸術大学 創立10周年を祝す

Celebrating the 10th year of
Shizuoka University of Art and Culture

静岡県知事 川勝平太

静岡文化芸術大学創立10周年を、静岡県民を代表し、心から寿ぎたく存じます。

本学は、地元からの強い要請を受けて、平成12(2000)年4月に、公設民営方式の大学として、県の強い関与のもとで開学しました。「公設民営」とは、平成16(2004)年に国家が全国の国公立大学に導入した独立行政法人の方式を先取りしたものです。すなわち公金は投入しますが、運営は学校法人にまかせ、学問の独立を重んじ、口出しはしないという方式です。当時としては、画期的な大学運営の試みであり、今日から振り返れば、国の一歩先を進んでいたのです。本学にはそのように、創立時から、地元浜松の「やらまいか!」の心意気、進取の精神が息づいています。

このたび、創立10周年を迎えるにあたり、全国の国公立大学と同じ独立行政法人(公立大学法人)に衣替えしました。中身すなわち大学

の研究・教育システムも運営方式もこれまでどおりです。ただこれまでは、県の公金を投入する際にはその都度、毎年、議会の承認を得なければならず不安定性をまぬかれなかったのです。しかしこれからは「運営費交付金」として定額が確実に投入されますから、財政基盤は飛躍的に安定します。大学関係者には、ご安心いただき、教育・研究に邁進してください。

本学は、開学当初は、その名前前から芸術家を養成する大学だと受けとられたところがありましたが、そのような限られた分野の才能の養成ではなく、もっと広く文化芸術をマネジメント(支え、活用し、育成)できる目利き・腕利きの人材の養成を目的にしています。いわば文化芸術立国の^{いしずえ}礎づくりです。

それは科学技術立国と深く結びついています。科学を応用した技術は、洗練されて無駄が省かれていくと、しだいに美しくなり、芸術性を帯びます。

日本の技術のレベルは、国際的にみてトップクラスであり、美しさを帯び、世界中から憧^{あこが}れられています。それゆえ、科学を追求する大学も、技術^{れんま}を練磨する企業も、その成果を享受する社会生活も、美しくあることを自覚せねばなりません。

日本の伝統技術は、完成の域に達するにつれて「匠^{たくみ}の技」「工芸品」といわれる美しいものになり、伝統日本を内外から「美の文明」として評価される国に仕立てあげました。現代日本の近代技術も、その洗練度は世界最高級の域に達しており、それを美しく使いこなす能力が求められています。「ものづくり」のみならず「ものづかい」においても第一級であることが課題です。生産の場でも生活の場でも審美眼や芸術性が求められているのです。物の作り方、物の使い方において、内外の人々をひきつける文化力を身につけるべき時代を日本は迎えています。芸術は美を追求します。技術は役に立ち用をなすものでなければなりません。

せん。技術は有用なものであり、有用であることと美しいことが一体になったのがデザインです。「用と美」とを兼ね備えたデザインは、小さな生産物から大きな地域づくりにまでユニヴァーサルに必要です。これからの時代、小さなものから大きなものまで動かす力がデザインです。「デザイン学部」「デザイン研究科」が本学にあるのは、そのような理由からです。

日本は、富国強兵を追求して軍事力・経済力をつけることをめざした「東京時代」を終えつつあり、「地域の時代」に入りました。国は防衛・安全保障政策に力点を置き、地域は独自の経済政策とともに、地域の魅力を高める文化政策をもつべき秋^{とよ}がきています。「文化政策学部」「文化政策研究科」が本学にあるのは、そのような理由からです。

日本の来し方を振り返り、これからの行く末^{すじがね}を、筋金入りの現実主義者の確かな目で見通していたのが、本学の基本構想を練られた故・高坂正堯先生でした。本学は、将来の日本全体のためになるように構想されて設立された、唯一無比のユニークな大学であり、日本が国際社会にとって有用な存在である以上、本学の発展は世界的使命をもつものです。そのような高い志と強い使命感とをもって本学の創設に尽力された高坂先生は、惜しくも、開学前に天に召されました。いわば幻の初代学長です。

初代学長の故・木村尚三郎先生は、高坂先生の構想を受け継ぎ、「ふりかえれば未来」という名句を残されました。歴史を振り返れば、現状が分かり、これからめざすべき課題が見えてきます。木村先生は西洋事情に明るく、フランスをご専門にされていました。先生は、文化大国フランスの文化力に、日本のもつ文化の潜在力が勝るとも劣らないことを確信されており、7年間にわたり、本学を文化力の発信拠点にするために尽力されました。

木村先生急逝の後を引き継いで二代目学長に就任した私は、在任期間は2年余りでしたが、高坂・木村両先生の志を継承し、学生・教職員が一丸となって、大学人がグローバルな視野をもつように海外の大学との提携を広げつつ、地域の現場としっかりした絆を固めることを心がけ、海外と地域に開かれた大学づくりに努めました。私の居場所は学長室から知事室に変わり、現場は遠州・浜松からふじのくに全域に広がりましたが、本学の目指すところと県のそれとは同じです。象牙の塔にこもって書籍だけで勉強するのではなく、そこを出て、学んだことを現場で試し、体にたたきこみ、考えぬき、学び直し、生きた知識・技術を心身に刻みつけて、自分も地域もともによくなっていく、そのような新しい実学が、本学の得意とするところです。地域づくり・国づくりの担い手は人です。静岡県では、ポスト東京時代をにらみ、地域が自立できるように「富国^{せきかく}有徳

の理想郷“ふじのくに”をめざしています。「住んでよし、訪れてよし」「学んでよし、働いてよし」「生んでよし、育ててよし」の理想郷です。本学は日本の理想を担う人材育成の拠点です。

10周年を迎えた本学の理事長・有馬朗人先生、学長・熊倉功夫先生は、それぞれ科学技術、文化芸術の最高峰をきわめた碩学^{せきかく}です。本学の「顔」は全国のどの大学にもまったくひけをとらず、一頭地を抜ぎんでいます。学生諸君は両先生をトップにいただくことを誇りにし、両先生をはじめ本学の先生たちのように、立派な人、徳のある人になってください。有馬理事長・熊倉学長は、創立から数えればそれぞれ三代目ですが、本学が学校法人から衣替えをし、公立大学法人になった静岡文化芸術大学における初代の理事長・学長です。

これまでの10年はいわば助走期間でした。今年から全国の公立大学と横一線にならび、本格的にスタートができるまでになった本学を、本県は誇りにしており、静岡文化芸術大学に対する支援を、県は惜しみません。静岡文化芸術大学が「地域の華」として風格をもって逞しく雄々しく発展していけるように、衷心よりご祈念申し上げます。

静岡文化芸術大学 10年のあゆみ

The ten-year history of Shizuoka University of Art and Culture



開学前のできごと

静岡県は、さまざまな分野で活躍できる“実務者の養成”を目指し、浜松市内に新4年制大学を設立することとしました。



建設工事中の校舎

2000年 2月



竣工した校舎

1999年 12月



石川嘉延県知事、 理事長就任

初代理事長に石川知事が就任しました。石川理事長は「新時代に応えられる大学として、地域、世界、世代に開かれた新しい文化の拠点を目指して、たゆまぬ努力をしていきたい」と抱負を述べました。



2000.2.12 一般入試実施(浜松北高校)

2000

平成
12年度

4月 開学式

21世紀に向けた実務型の人材の養成と地域貢献を設置理念とした大学を目指して4月13日に開学しました。開学式において、理事長である石川知事は「豊かな人間性との確かな時代感覚を養い、文化、芸術に優れた人材がこの大学から輩出されると確信している。われわれも大学発展のため努力する」とあいさつしました。

この4月13日を開学記念日と定め、毎年記念行事を実施しています。



開学式にて挨拶する石川理事長



4月 木村尚三郎氏、初代学長に就任

静岡文化芸術大学初代学長として、木村尚三郎氏が就任しました。「五感の感性を鋭くすることが、次の技術を生むには不可欠。現実感と美意識とを併せ持った実務家を育成したい」と抱負を述べました。

4月 入学式

文化政策学部とデザイン学部の第一期生384人を含む約500人が出席して入学式が行われました。木村学長は「第一期生の誇りを持ち、美意識を備えた人間として21世紀に活躍してほしい」と新入学生を激励しました。



4月

記念植樹

開学を記念する植樹では、石川理事長、木村学長、新入生代表により、静岡県の木・キンモクセイ、浜松市の木・松、そして学問にゆかりの深い、紅梅が植えられました。



2000.5.29 中日新聞

5月 大学公開デー「大学へ行こう!!」を開催

「地域に開かれた大学」を目指す本学の様子を市民に知っていただくため、大学公開デーを開催しました。教職員や学生が案内役を務め、公開講座や工房体験のほか、トークセッションなどを行い、8,000人の市民で賑わいました。



2000.8.3 静岡新聞

8月

第1回オープンキャンパス開催

受験生を対象に講義内容や施設の充実度を知ってもらうオープンキャンパスを開催しました。全国から約1000人の高校生、保護者が訪れ、学生たちもボランティアで案内役を務め、学生生活の魅力をPRしました。

5月

浜松まつりで開学を祝う凧揚げ

浜松市を挙げて新大学を歓迎しようという市役所部長会の協力により、「祝開学 静岡文化芸術大学」の文字が入った凧が中田島の空に舞い上がりました。当日は、教職員や新入生ら約40名も加わり、凧糸を操りました。



11月 第1回「碧風祭」開催、SUACビール発売

学生による催しのほか、市民団体や企業からの協力を得て実現した企画イベントも多数行われ、まさに地域に開かれた大学祭となりました。また、食文化研究会、浜松酒造と共同制作した大学ブランドの地ビール「SUAC BEER」をピアガーデンで販売しました。



碧風祭とはスクールカラーの鮮やかな青(碧)と浜松の風をイメージして命名しました。SUACから浜松に、世界に、未来に、新しい風を起こすような碧風祭を創り出していこうという思いが込められています。



2001.5.2 中日新聞

5月

「文化芸術総合演習」にて 石川理事長が講義

石川嘉延静岡県知事が全1年生を対象に特別講義「文化芸術総合演習」を行いました。「食欲に学んで、世界で活躍してほしい」という熱いメッセージとともに「皆さんが社会で活躍するこの30～50年は文化と芸術の時代」と、SUACで学ぶ意義を強調しました。



5月

キャリア・ オフィスを設置

開学2年目に「キャリア・オフィス」を設置しました。従来のように就職を指導するだけでなく、学生のニーズに応じた企業紹介、資格取得など、あらゆるキャリア・アップを支援することが目的となっています。



2001.7.6 中日新聞

7月

「都市文明論」にて 浜松市長が講義

全学共通科目「都市文明論」の特別講師として、北脇保之浜松市長をお招きしました。「新世紀の浜松がめざす都市づくり」をテーマに行われ、「これからは都市の時代。国や県という大きな単位ではなく、市が大きな意味を持つ時代になる」と展望を紹介されました。

2001

平成13年度

10月

第1回特別公開講座 「薪能」開講

本学の出会いの広場を会場として、本格的な薪能公演「伽藍風華(がらんふうが)」を初めて開催し、市民や学生ら約800名が幻想的な舞や謡に酔いしれました。イベントをプロデュースしたのは、本学でアートマネジメントを学ぶ学生達でした。

2001.10.20 中日新聞



かがり火の幻想世界



4月

「文化芸術総合演習」にて 鈴木修氏が講義

「文化芸術総合演習」の一環として、鈴木修スズキ株式会社社長をお招きしました。企業の求める人材や業界の現状などについて講義をされ、「就職する際に『この仕事をするために4年間がんばってきた』と言えるくらいの目標を持ってほしい」と、学生への期待を述べました。



6月

ジェラルド・キャロン氏特別講義

世界的なデザイナーであるジェラルド・キャロン氏(フランス)をお招きし、特別講義と学生たちとの座談会を行いました。講義の中で「デザインが世界を画一化すると同時に、デザイン自体も各地域から影響を受けている」と語り、相互作用を意識するよう学生に呼びかけました。



2002

平成14年度



2002.6.13 静岡新聞

6月

全学規模で 初の防災訓練

全学規模の防災訓練を行いました。大規模災害において特に課題とされる学生の把握については、「避難者カード」を導入するなど、より実践的な防災訓練として取り組むことができました。

10月

天皇、皇后両陛下が
本学をご視察

天皇、皇后両陛下が本学をご視察されました。
浜名湖花博会場に設置されたベンチや、風力
発電を利用した道具を製作した学生たちが、天
皇、皇后両陛下に作品について説明しました。



2003.10.25 中日新聞

2003 | 平成
15年度

11月

文部科学大臣より
大学院設置許可

2002.11.29 静岡新聞



3月

第1回
卒業式を挙

開学後初となる卒業式を挙行し、一期生330名
が卒業証書を受け取りました。「皆さんは本学の
建学者。大学の理念に新しい息吹を与え、基礎
を固めてくれた」と木村学長が祝辞を贈り、石川
理事長は「魅力ある地域作りの推進力になると
確信している」と期待を寄せました。



2003.4.16 静岡新聞

4月

大学院(文化政策研究科、
デザイン研究科)を開設

高度専門職業人の養成を目的とした
大学院を開設しました。初年度は、文
化政策研究科に7名、デザイン研究科
には11名の大学院生が入学しました。



4月

浜名湖花博
「もぐらのねぐら」出展

屋上緑化の技術を駆使して作られた「もぐらのねぐら」
を浜名湖花博に出展しました。学生たちが作り上げた
この「最先端の野山」は、人気を博しました。



2004 | 平成
16年度



3月

湖西大学校(韓国)と
国際交流協定を締結

3月7日、木村学長が韓国・牙山市にある湖西(ホン)大
学校を訪れ、開学後初となる国際交流協定を締結しまし
た。これまでに語学研修や交換留学、交流セミナー、教
員の相互訪問による特別講義などを実施しています。

8月 湖西大学校との「国際大学交流セミナー」を開催

韓国・湖西(ホソ)大学校の学生と本学学生が、地域活性化を考える「国際大学交流セミナー」の成果発表会を開催しました。自作のCMを放映したり、温泉に花と音楽を結びつける計画などを発表し、活発な交流を展開しました。



2005

平成17年度

10月

スマトラ震災報道写真展及びシンポジウムを開催

前年12月にインド洋沿岸を襲ったスマトラ島沖地震。その震災に関する写真や絵画を展示した「スマトラ震災報道写真展」が、学生たちの企画・運営によって、本学ギャラリーで開催されました。



11月

「文化政策研究大会2005」を本学で開催

まちづくりなどに関する政策について、世界の研究を学び、交流を深めるため、「文化政策研究大会2005 in 浜松」が本学で開催されました。全国から約150名が参加し、ノルウェーやシンガポールの研究者による特別講演やシンポジウムが行われました。



8月

SUACデザインセミナーを初開催

「2006SUACデザインセミナー・デジタルものづくり」が開催され、デジタル技術を利用した切削器具や金型の設計機器などが展示されました。さらに、大学と企業の連携事例なども紹介され、来場者から好評を得ました。



2月

上海工程技术大学(中国)と国際交流協定を締結

2月26日、本学において、中国・上海工程技术大学との国際学術交流協定が結ばれました。デザイン学分野を中心に、相互訪問による特別講義や共同研究、学生作品の交流展示会、交換留学制度など、両大学間の教授・学生による相互交流について確認しました。



10月

木村尚三郎 初代学長 逝去



11月

木村尚三郎学長の「お別れ会」開催

故木村尚三郎初代学長の「お別れ会」が本学講堂で開催されました。「五感を大切に」をテーマに、在校生や卒業生をはじめ、理事長の石川静岡県知事、北脇浜松市長、鈴木修スズキ株式会社社長など、政財界からも多数のご列席をいただき、故人の人柄と多大なる実績を偲びました。

2006

平成18年度

3月

フィンドレー大学(アメリカ)と国際交流協定を締結

3月20日、上野学長代理がアメリカ・フィンドレー大学を訪問し、国際交流協定を締結しました。同大学は留学生用英語研修プログラムが充実しており、締結後は、本学の学生が半年~1年間の留学を経験し、語学を中心に学んでいます。



2007 | 平成19年度

4月

川勝平太氏、第2代学長に就任

前年10月以降空席となっていた学長に、川勝平太氏が就任しました。川勝学長は、教育再生のための実学の必要性を訴え、学生に対しては「30歳までは修業時代。これからの10年は自分を鍛えることが必要。自分を磨く訓練に時間を割いてほしい」とエールを送りました。



6月

「日伊喜劇の祭典」を開催

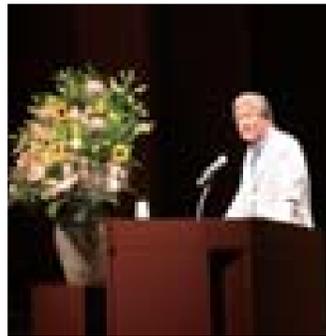
日本の「狂言」とイタリアの即興喜劇「コンメディア・デッラルテ」を融合させたユニークな舞台「日伊喜劇の祭典」が本学講堂で開催されました。様式的な表現に暗示された「庶民の喜劇」の普遍性が来場者の関心呼び、大盛況のうちに幕を閉じました。



6月

「日本文化政策学会」設立総会を本学にて開催

国や地方自治体、民間団体などの文化的活動について、学術的な分析・比較を行う学術団体「日本文化政策学会」が発足し、本学で設立総会が開催されました。総会では青木保文化庁長官による記念講演も行われました。



6月

「日本デザイン学会」研究発表会を本学にて開催

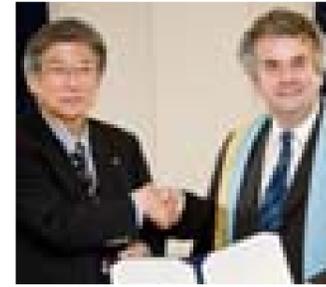
「日本デザイン学会」の春季研究発表会が本学で開催されました。「産・学・官とデザイン」をテーマに、全国から約350名が集まり、約180の研究発表やシンポジウムが展開されました。



9月

ウェールズ大学トリニティ・カレッジ（イギリス）と国際交流協定を締結

川勝学長がウェールズ・カマーゼン市にあるウェールズ大学トリニティ・カレッジ（現校名：ウェールズ大学トリニティ・セント・デイビッド）を訪問し、語学留学をはじめ、教職員・学生の交流を活発化させる国際交流協定を締結しました。



10月

「日伯移民100周年記念パネル写真展」開催

浜松で暮らすブラジル人の子どもの現在と未来にスポットを当てたパネル写真展を開催しました。学生有志約80名で立ち上げた実行委員会によって運営され、共生社会に向けたメッセージを発信しました。



10月

浜松市長が都市文明論を講義

全学共通科目「都市文明論」の特別講師として、鈴木康友浜松市長が「政令指定都市浜松の都市運営」をテーマに講義をしました。地方自治の解説とともに自らの政策を学生に紹介し、「マニフェストによって政治が行われるようになれば、日本の政治は変わる」と強調しました。



2008 | 平成20年度

11月

学生コンペで最優秀賞受賞



本学大学院生を中心とする9名のグループが、愛知建築士会主催の学生コンペ「瀬戸グランドキャニオン」において、全国84件の応募の中から見事最優秀賞を受賞しました。作品は柱とランドスケープをコンセプトに、円柱に降った雨水により、緑を復元させていく様子を模型で表した作品を出展しました。



2008.11.22 静岡新聞

11月

「第5回静岡国際オペラコンクール」開催

3年に一度、世界各国の若手声楽家が集う「静岡国際オペラコンクール」が開催されました。この年は、世界33カ国から306名の応募があり、光岡暁恵さんが日本人初の1位に輝きました。また、今回のコンクールから本学内に事務局が設置され、企画運営に携っています。



11月

しずおかユニバーサルデザイン国際シンポジウムを開催

静岡県のUD施策導入10周年を記念し、県内外の企業、福祉関係者、市民ら約200名を集めたシンポジウム「暮らしのリ・デザイン」を開催しました（静岡県と共催）。シンポジウムでは、海外のユニバーサルデザインの導入事例などが報告されました。





8月 浙江大学城市学院(中国)と国際交流協定を締結

中国・浙江省杭州市にある浙江大学城市学院と国際交流協定を締結しました。両校とも「国際社会に貢献する開かれた大学」として、相互交流を深めることを確認しました。



9月 川勝平太県知事、理事長に就任

石川理事長が辞任した6月以降空席となっていた理事長に、川勝知事が就任しました。新理事長となった川勝知事は「理事長として大学に戻るとは思わなかった。大学の発展のために力を尽くしたい」と抱負を述べました。

10月

第24回国民文化祭シンボルイベント・第3回県民オペラ「蝶々夫人」公演

「第24回国民文化祭・しずおか2009」のシンボルイベント「THE オペラ」に位置付けられた、第3回県民オペラ「蝶々夫人」が上演されました。上演に先立ち、本公演をより楽しんでいただくためのワークショップも行われました。



10月 文化庁メディア芸術祭開催

国民文化祭の一環として、「音」をテーマにした機材やマンガ等を展示する「文化庁メディア芸術祭浜松展」が開催されました。展示ゾーンを「音を奏でる」「音を読む」「音を観る」の3つに分類し、そこに約70作品が展示されました。本学主催のメディアアートフェスティバルも同時開催しました。

2009 | 平成21年度

1月

熊倉功夫氏、第3代学長に就任

1月1日付けで熊倉功夫氏が第3代学長に就任しました。「学生に伝えたいことは、日本人が大事にしてきた感覚である。人と人との関係が希薄になっている社会を放って置いてはいけません。公の場での振る舞い方を大切にしたい。」と語りました。



4月

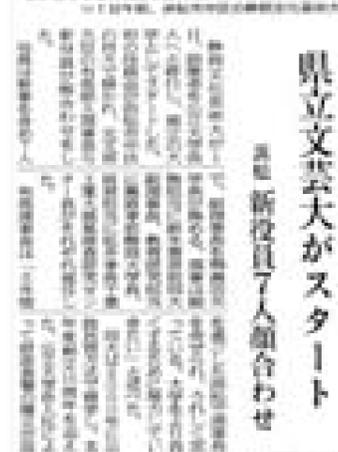
有馬朗人氏、理事長に就任

4月1日から有馬朗人氏が新理事長に就任しました。入学式では「少年期の5年間を過ごした浜松への愛着から理事長職を承諾した」と就任理由を述べ、学生たちには「知識をどう生かして学ぶかが求められている」と奮起を促しました。

4月

静岡県設立の公立大学法人へ移行

大学の運営主体を学校法人から公立大学法人へ移行し、県立の大学として新しいスタートを切りました。今後はこれまでの実績と公立大学法人制度のよさを活かし、さらなる発展を目指します。



2008.4.1 静岡新聞

2010 | 平成22年度

7月

第5回自助具デザインプロジェクト(JDP)作品展を開催

「フライパンを固定するための道具」、「装身具の工夫」など、障がい者のための自助具作品展示会を開催しました。作品展示会5周年を記念し、JDP活動5年間分の作品約50点を展示し、自助具制作の相談も受け付けました。



10月

創立10周年記念式典を挙げる



SUACへの想い

Alumni voices



デザイン学部 技術造形学科卒(二期生)
株式会社モスデザイン研究所
阪本圭造

デザイン学部 生産造形学科卒(五期生)
アズマ工業株式会社
小林位知子

文化政策学部 国際文化学科卒(一期生)、同窓会長
静岡県立二俣高等学校教諭
梅谷拓宜

文化政策学部 芸術文化学科卒(四期生)
株式会社ビーエーシー
浅野里佳

伝統の一翼を担って

Playing a part in tradition

さまざまな分野で活躍する卒業生4名を招いた座談会。

10年という“伝統”の一翼を担ってきた彼らが語る

SUACへの愛情、そして、これからの

大学、学生に期待することとは。

梅谷 SUACが10周年を迎えたということで、今日は一期生の僕と阪本くんを含めた卒業生4名にお集りいただきました。お忙しいところ、本当にありがとうございます。まずはじめに、みなさんの現在のご職業についてお伺いします。

小林 私は清掃用品を作る会社の開発部に勤務しています。簡単に言うと、お客様から「こういうものを作ってほしい」という要望を製品化していくという仕事ですね。CADを使った製品デザイン設計はもちろん、見積書の作成、金型のチェック、製品の調整、販売の仕方まで、担当する製品に関しては一から全て

携わっています。

阪本 僕は都内の広告デザイン会社に勤めていて、肩書はアートディレクターです。しかし、デザインなどの実作業だけではなく、営業をはじめ、市場調査などの業務全般をこなしています。広告業界は、かなり人の入れ替わりが激しいのですが、一応、もう7年目。広告業界は学生の時に思っていたのと若干イメージが違ったのですが、もう慣れて今では楽しく仕事ができていますね。

浅野 私も広告会社の企画部でプランナーをやっています。企業やメーカーの販売促進やいろいろなイベントを考える

という仕事ですね。お客様の「こんなことがしたい」という要望や課題に対して、どうやり方が最善なのか、どう打ち出し方をすればいいのかを提案しています。あとフリーペーパーも発行している会社なので、取材に行って、原稿書いて、写真を撮ってということも行っています。大学でいろいろな分野を勉強して、いろいろな経験をしたことが生きていて、社会に出てからも「自分で動こう!」という気持ちで仕事ができていますね。そういう点で、この大学を卒業して、今の自分にとってすごくプラスになっていると思います。

梅谷 確かにこの大学は幅広い分野について学ぶことができるから、社会に出てから「あ、あの時の講義がこんなところで役に立っている」と思うことは少なくないですね。僕は二俣高校で国語の教諭をしています。SUACを卒業して教員になることは、ある意味ウィークポイントなんですよ。国語教育学科で学んだわけでもないし、教員のスペシャリストを育てる学校でもない。ただ、SUAC出身の教員だからこそできる生徒との関わり方とか、教え方とか、そういったものを自分のスタイルとしてやっていきたいという気持ちで頑張っています。

小林 そうい先生って良いですよ(笑)。自分の考え方や経験から学んできたことをベースに筋の通った説明をしてくれそう。

梅谷 恐縮です(笑)。でも、僕が在籍していた国際文化学科は、人文系特有の“何でも屋”みたいなところがあり、「社会に直接こう結びつく」というような内容の勉強が少なかったですね。でもやはり、この大学だからこそ身に付いた知識や経験というのも多く、それが僕の人間としての幅を広げてくれたのではないかなというはすごく感じています。



伝統の一翼を担って

い、生徒たちもある意味、やりたい放題、好き勝手やらせてもらっていた部分もあって、そうした経験が、学生の時には気付かないけれど、社会に出てからすごく活きているような気はするよね。

浅野 私もそう思いますね。社会に出て思うことは「経験に勝るものはない」ということ。でも、実際働きはじめるとなかなか自由が利かないですね。だからこそ、学生のうちにいろいろ学んで、経験してほしいと思います。とにかく「何でもやってみる!」という気持ちで取り組んで「問題や課題は出てきた時に考えよう」くらいのパワフルさが必要だとすごく思

よ!!」と激を飛ばしたい。何かアドバイスしてもすぐに「先輩、それは難しいですよ」とか返ってくるんですよね、今の学生たちは。そうではなくて「とにかくやろう! やってみよう!」というのが欲しいんだよね。あんまり口出しするとダメなんだけど、どうしても当時の血が騒ぐと言うか……(笑)。

小林 大学に対して、今後期待することや、希望することってありますか?

阪本 もっと先生と生徒の踏み込んだ交流というか、よりオープンな交流ができる環境を作してほしいというのは感じますね。僕は学校を卒業してから先生と

もともとこの大学って、良い意味で“小さな大学”って言えると思う。学生と先生との距離がすごく近いのが特徴ですからね。

小林 実績も経験もあって、おもしろいことをやっていたり、興味深いものを作っていたり、とにかく刺激的な人が多いですね。私もよくいろいろな先生の研究室に遊びに行きました。とにかく楽しかったですね。

浅野 当時の大学院文化政策研究科長をされていた深井晃子先生とか、経歴を見ると驚きますよね。そういう先生たちが集まっている環境っていうのはなかなかないし、確かに社会に出てからも役立ちますけど、学生時代にもっと踏み込んだお付き合いをしていけば、より力になりそうですね。

梅谷 こういう話が出て思うのは、もっと文化政策とデザインが学部の垣根を越えて継続的に関わり合いが持てる環境作りも、大学に期待したいところかなと思います。木村初代学長がおっしゃっていた「この大学は各学科から6人集まれば、企画からものづくりまで全てを行うことができる」という言葉があります。まさにその通りで、特徴的なパワーを持っている大学だからこそ、より大学としての一体感というか、大学全体で何かを作り上げるみたいな雰囲気をもっとあればさらに良いと思います。

小林 私も「もっと他の学科の友だちを作っておけば良かったな」と思う時がありますね。

浅野 学部が違うだけで、全然考え方が違うからおもしろいですね。私ももっとそういう考え方の違う人たちとの交流を多くしたかったなというのは感じますね。

梅谷 ちなみに、阪本くんは僕の友だちだよな?(笑)

阪本 もちろんです(笑)。でも、僕の考えから言うと、大学時代に交流できなかった人でも、社会に出てから何かの縁で繋がったりすることがあって、僕はそれをすごく大切にしている。学生時代に悪ふざけばかりしていたヤツとかすごく真面目だったヤツとか、当時は交流がなかった人たちでも、実は仕事場が近かったり、業種でつながっていたりということが少なくないです。そういう点では、単純に「SUACの卒業生で良かったな」と感じさせてくれますね。

梅谷 この前、10周年記念の同窓会をやらせてもらいましたが、すでに退職され

た先生、事務局の方、卒業生などを合せて約650名も集まったんですよ。だから、そういったところでの交流とか、単なる同窓会ではなくて、これからの自分の仕事にも活かしていけるような交流ができたら良いですね。

浅野 すごい!そんなに集まったんですね。SUACって他の大学と比べても「愛着の湧く大学」という印象を強く感じられるところだと思いますね。それがこの同窓会の数字にも表れていると思いました。こういう大学への愛着っていうのは、時代に関係なく、ずっと学生たちに持っていてもらいたいし、大学としても愛着の湧く大学で続けてほしいなと思いますね。

梅谷 そうですね。これもひとつ10年で培ってきた伝統ですから。

阪本 ずっと続いていてほしいよね。

梅谷 私は「伝統」という言葉がすごく好きですが、今の在学生在が気軽に「伝統」という言葉を使ってしまったら、伝統はそこで終わってしまうような気がします。だから「これは先輩たちからの伝統です」なんて軽々しく言ってほしくないと思います。ある意味、僕たちが作り上げてきた伝統を壊してもいいから、その場その場で、その時代その時代で「何でそうするのか」「何でこれをやるのか」「何でやらなければいけないのか」ということをしっかり考えて行動してほしいなと期待します。それが何か新しいものを作っていくことでもあり、今までの伝統を守っていくことにもなると思います。少し偉そうに言うけどね(笑)。



あと、大学の雰囲気として「何でもやってみよう!」「何でもやっちゃおう!」というのがありましたから、そういう校風みたいな部分もすごく自分に合っていた気がしますね。

阪本 僕と梅谷くんは一期生だから特にそうだよな。入学が決まってからも「で、実際、何を学ぶ大学なんだ?」という気持ちだったし(笑)。大学としてもまだ手探りの状態だったのではないかな。でも、そうした環境の中で、先ほども話が出たように本当にいろいろな分野、今まで全く知らなかったり、全く興味がなかったような分野まで幅広く学ばせてもら

います。何でもできるのは、学生の特権ですから。

小林 私が大学を卒業して社会に出てみて、大切だなと思ったのは「人との関わり合い」。学生の時にいろいろな人と関わって、みんなで一緒になって何かひとつのことに打ち込むみたいな、そういうことを体験できたのは大きかったですね。社会に出た時に「この人のために仕事をしたい」と思ってもらえるような魅力的な人間になるためには、すごく大切なことだったと思います。

梅谷 あえて苦言を言わせてもらえば、今の学生たちに「もっといろいろやれ

の交流が多くなりましたけど、改めて「この教授はこういうことをされているんだ」「この教授とならこんなことができるんだ」と発見することが多いです。学生の頃は表面的な情報でしか知らなかったことですね。ただ、可能であればこうした発見は学生時代にしておきたかった。そうすれば、劣等生にならずに済んだのかなって(笑)。

梅谷 SUACにいる先生方は、本当にすごい方たちばかりなので、そこを活用しないのはもったいないよね。僕も卒業してから「あの先生、こんなにすごい人だったのか」と気付くことが多いですよ。



原点に立ち返り、
新しいビジョンを
構築
Back to basics for
a new vision

木村初代学長らが掲げてきた、SUACの基本理念。
文化政策学部設立の経緯とともに、改めて理念を
紐解くことで、これまでの成長と課題、そして、
新たなスタートへのビジョンを見つけることができる。

展
望

テーマ **文化政策**

対談 前副学長 **上野征洋** 文化政策学部長 **馬場孝**

理念は、永続的なもの。ビジョンというのは、
時代に即して変化するもの(上野)



文化政策学部設立の経緯とSUACの理念

馬場 私は10周年という節目の年に文化政策学部長を仰せつかりましたが、上野先生は、本学設立準備の主要メンバーとして、また、開学後は文化政策学部長、副学長などとして深くご尽力されました。最初に「文化政策学部」設立の経緯についてお聞きしたいと思います。

上野 当時の社会的背景、そして、設置者である石川前県知事と初代学長・木村尚三郎先生のお考えによるところが大きかったですね。1980年代～90年代の日本というのは高度経済成長が終焉を迎え、「これからは文化の時代だ」という政府の方針が打ち出された時です。それで、慶応大の総合政策学部、東大の総合文化研究科など、文化や政策を焦点にした教育分野をいろいろな大学が設置しはじめました。いわば物の豊かさから心の豊かさ、成長社会から成熟社会に切り替わった時代ですね。当然、本学の設立準備段階でも「文化の時代」という基本認識が石川知事や木村先生にあって、それが教育や研究分野として「文化



上野征洋
前静岡文化芸術大学副学長、元文化政策学部長、
日本広報学会副会長



馬場孝
文化政策学部長、
研究分野:ナショナリズム論、国民国家論

「SUACならこれができる」「SUACはここが違う」を打ち出していきたい(馬場)

政策が妥当ではないか」となったわけです。

馬場 地元の産業界や商工会議所などからの意見はあったのでしょうか？

上野 そもそも大学の設置要望は、地元の経済界や商工会議所からでした。浜松にはもともと静大工学部があって、浜松医大がその後設立されていたので、「理科系よりも文化系の大学を」という声は当初からありました。「ハード系ばかりではなく、ソフトウェアの実務科目をちゃんと学べる大学を作ってほしい」ということですね。これは「企画立案総合演習」などに反映されています。ですから、木村先生が何度もおっしゃっていましたが、「美意識や感性を持った実務的な人材育成を」というのが、SUACの設立方針というか、一貫した教育ポリシーとなっていたのです。

馬場 なるほど。一方、当時は「文化政策学部」と言っても「何を学ぶところなのか？」がすぐには伝わりにくかったと推察いたします。学部の中身と言いますか、履修内容を含め、どのような考えで「肉付け作業」を進めていったのでしょうか？

上野 浜松は産業の町ですから「産業界と行政のニーズに応え、地域の政策や文化振興を教育・研究する学部」という位置づけの中で進めていきました。文化政策のベースになるのは、地域のニーズに応える、いわゆるひらがなで書く「まちづくり」と文化の部分です。都市計画とも空間造形とも違う、ソフトウェアの領域を指します。例えば市民の知恵を集めて、文化施設や公園のあり方を考えとかね。

馬場 地域のニーズに応えるというのは、大

学全体の理念でもありますよね。

上野 そうです。これも木村先生がおっしゃっていたことです。人と人、人とモノ(社会や自然)、人と過去(歴史や伝統)、いわばこれら「空間軸」と「時間軸」がクロスするところで人間の存在意義や大学の存在意義を考えていくというのが、SUACの理念の構造になっています。こういったSUAC設立の原点の部分は教員の顔ぶれが変わっていてもしっかり継承して、学生たちに伝えていってほしいと切望します。

馬場 そうですね。私も含め、もう一度原点に戻って次の10年を見据えていかなければいけませんね。

上野 理念と言うのは、永続的なものなんです。他方、「大学がどんな人材を作るのか？」という人材像や大学像はビジョンであり、時代とともに変化していかなければならない。この2つをバランス良く取り入れながら、今後、公立大学として育てる人材のイメージを構築していただきたいと思います。



文化政策のキーワードは“地域”を打ち出すこと

馬場 本日、上野先生からお話を伺って、学部長としての今後の展望が見えてきました。まずは、木村先生のお言葉を柱にした、大学の理念や精神の部分。それをよく考え、改めて原点認識を向上させなければと思いました。また、これは個人的な意見ですが、公立大学になったということで、これからの10年は「発想の転換」というのも大事になってくると思っています。これまでの

SUACの良さを保ちながら、他の国公立大学にはない特色を出していく。破天荒なことをするという意味ではなく、他の大学とは違う部分をもっと打ち出していきたいな、と。

「SUACならこれができる」「SUACの文化政策学部はここが違う」と感じてもらえるような要素を、実績を作りながら、地元、そして全国の学生に知ってもらえたらと考えています。

上野 賛成ですね。特にこれからは、地域からもっと文化政策学部への期待が高まってくるはず。浜松は、世界的な産業があって、地域がコンパクト、中心市街地活性化というテーマもあるし、多文化共生の面から見ても教育や研究の実践に恵まれている土地です。フィールドワークにもうってつけの場所ですからね。だから、「浜松という地域だからこそ」の特色を出していけばいいのではないのでしょうか。それが一番わかりやすいと思います。教員の中にも「浜松だからこの大学で教えたい」という方が少なくありませんからね。

馬場 そうですね。「地域とつながる」というのも文化政策のキーワードのひとつですからね。

上野 もうひとつ木村先生の言葉を紹介しましょう。「グローバルな発想を持って、ローカルに尽くせ、すなわちグローバル」。これは今、私や馬場先生が思い描いていることに通じますよね。これからの10年でSUACがどう輝いていくのか、どう地域に貢献していくのかということ、木村先生の言葉や理念を思い出しながらじっくり構築していただきたいと思います。期待しています。

今後求められる デザイナー像と その育成

From student to
designer:
an apotheosis

「ユニバーサルデザイン」という言葉がまだ一般的ではなかった10年前、日本で初めてユニバーサルデザインを基調にしたデザイン学部が設立された。これからの10年、SUACに求められる人材育成とは。

テーマ | ユニバーサルデザイン

インタビュー | 元デザイン学部長 鴨志田厚子 | デザイン学部教授 三好 泉 (聞き手)

デザインの基本は「不特定多数のため」ですね(鴨志田)



自らデザインしたユニバーサルデザインベンチを前に語る。

ユニバーサルデザインを 追い求めて

三好 ユニバーサルデザイン教育も10年目を迎えました。ここで改めて、鴨志田先生がユニバーサルデザインを基調にしたデザイン学部を浜松に作られたときの思いや考えをお聞きしたいと思います。

鴨志田 インダストリアルデザイン(工業デザイン)の仕事をする上で、キーワードとなっていたのが「不特定多数のため」。誰にでも使いやすい、というのがデザインの基本だったんです。でも、よく観察してみると、障がいのある方や高齢の方など、使えない人たちがたくさんいるのが現実としてありました。高齢社会と言われていの中で、もっとデザインの幅、「不特定多数」の幅を広げる必要があるだろうとも考えましたね。このままでは、デザインの方向性が片寄ってしまうのではないかと危惧がありました。

三好 そういう中で、これはきちんと教育からやっていかなきゃいけない、デザイン教育の中心としてユニバーサルデザインが必要だとお考えになったわけですね。

鴨志田 そうです。当時はまだユニバーサル



鴨志田厚子
元静岡文化芸術大学デザイン学部長、
財団法人共用品推進機構理事



三好 泉
静岡文化芸術大学デザイン学部教授。
研究分野:プロダクトデザイン、ユニバーサルデザイン

非常識じゃないと、新しい発想とか開発なんてできないですよ(鴨志田)

デザインという言葉すら聞き馴れていなかった時代ですが、浜松には、ものづくりに極めて活発な企業がたくさんありました。そういう企業の方たちや県や市が積極的に後押ししてくださったことが、学部設立の上でとても大きかったですね。私自身も「勉強しなければ」という思いが深まりました。

三好 当時はユニバーサルデザインを基調にしたデザイン学部というのは、日本になかったわけですね。そこに、あえてユニバーサルデザインを基調にした学部を設立するというのは大胆な発想だったのではないですか？

鴨志田 でも、ものづくりデザインは、もともと使う人が主役。「これから大きく変わっていく社会のために、新しいデザインを目指す」というメッセージをより強調する意味でも、ユニバーサルデザインという言葉在前面に打ち出した学部にする必要があったのだと思います。

三好 ユニバーサルデザインは、デザインの本質ということですね。

鴨志田 そうですね。現実社会を多面的に見据えて“ちゃんとデザインすること”がユニバーサルデザインです。人は体力、気力などによって変化していきますが、それらを受け止めて対応することがデザインの仕事だと思っています。



未来のデザイン学部と デザイナー像

三好 これから先、デザイン学部として、どのようなユニバーサルデザイン教育をしてい

たら良いのでしょうか？
鴨志田 もう開学10年ですから、「言葉」から「実践体質」に進化する時期ではないでしょうか。この頃は自宅でおじいさん、おばあさんと生活している学生は極めて少ないですよ。だから実態を知らないと思うんです。頭の中で高齢者や障がい者を想像してもわからない。せめて時間をかけた調査で補うことから始めたいかがでしょう。例えば、高齢者と半日ぐらい一緒に過ごすのも良いと思います。今まで気付かなかったことに、ハッとしたり、ドキッとすることがいっぱいあると思いますよ。そういう調査を行えば、講義でいろいろ教えるなくても学生たちが自然に学んでいくはずですよ。

三好 教えるのではなく、気付きの場を設定することが大事なんですね。

鴨志田 はい。多少のアドバイスはするにしても、マニュアルやデータだけを教えるのでは限度があります。それよりも、もっと生の社会を見せてあげて、さまざまなことに対して敏感に察知できるような、そんな環境作りですね。

三好 それでは、今後SUACの学生に期待すること、どのようなデザイナーになってほしいと思っておられるのかを教えてください。

鴨志田 ビジョンが描ける人、実践設計ができる人になってほしい。本やデータだけ読んで呑みにしては、本当に良いものなんて作れません。先程も言いましたが、ドキドキしたり、ピビッとしたり、そういう感覚を大切にしたいものづくりやデザインは必ず使う人に通じると思います。だから、しっかり現場のことを踏まえること。そして、相手の身になるこ

とです。「私はこれが好きだから」とか「自分はこう思うから」だけではダメですよ。「これを使う人はどういう人なんだろう?」という視点は絶対に忘れてはいけません。これらを踏まえた上で、もっと言えば、「これからの社会は自分たちで提案して作り上げていくんだ」というような、壮大な目標や夢を語る学生であってほしいと思います。

三好 それが今後求められるデザイナー像なのですね。

鴨志田 そう思います。私はずっと「非常識」と言われてきましたが、結局、その「非常識」が糧になりました。非常識じゃないと発想とか開発、新しいデザインなんてできない(笑)。今自分が持っているアイデアは“ないもの”と仮定してみたり、否定したりしてみる。そういう習慣付けをすると「非常識」な考え方ができる頭になってくると思います。あとと思うのは、世界に目を向けて、例えば「ユニバーサルデザイン運動」のようなものを大学を拠点に浜松から起こしてみたいと思います。「ユニバーサルデザインとはこういう考え方で、浜松ではこんなことをしていますよ」と発信していく。そうすると、世の中が目撃しますし、それは学生にも刺激になって、教育循環の上でも良い状況が生まれるのではないのでしょうか。世の中は次々に変化していきますし、常識は時代によって変わるものです。今ある常識にとらわれずに、「自分が感じたもの」「相手の身になって考えたもの」を発信していくことが、世界を変えるデザインへとつながっていくと思います。

アートマネジメント

の視点、 現場からの声

Art Management voices :
expert perspectives from
SUAC to the Field

本学の参与としても尽力されている渡邊館長と、
本学の一期生で、現在、学芸員として活躍する中村さん。
佐野美術館で“美と生活をつなぐ”仕事に携わる2人が、
各々の立場、視点、経験からメッセージを伝える。

テーマ | アートマネジメント 対談 | 財団法人佐野美術館館長 渡邊妙子 | 財団法人佐野美術館学芸グループ主任 中村麻紀

「美と生活を結びつける」という方針は、
本当に素晴らしいと思います(渡邊)



美と生活を結びつける

中村 私はSUACの第一期生として入学して、そこで初めて、芸術と社会をつなぐ「マネジメント」という言葉を知りました。それで、す

ぐに惹かれました。もともと作り手ではない形で美術の仕事をしたいという願望があったので、マネジメントの仕組みを知ることが「これは私にぴったりのジャンルなんじゃないかな」と思いました。先生方も現役で活躍

されている方が多くて、実践的な学びをすることができたこともSUACで良かったなと思えるところですね。

渡邊 私は開学時の評議員会に参加させていただき、SUACの成り立ちを見守ってきました。木村尚三郎先生からは「自分は芸術家を作るつもりはない。これからの世の中は、美術、芸術、デザインがより文化性の高い、日常生活を豊かにするものになっていくから、それを仕事で生かせる人材を育成したい」というお話を伺ってそれは素晴らしいことだ、と。私が佐野美術館で掲げているテーマにも、生活の中で、例えば絵を一枚持つとか、日常の食器の中にひとつ美しさを求めていくとか、そういった潤いのある生活の手助けをする美術館にしたいという思いがあったので、木村先生の考え方に大変共感しました。「美と生活を結びつける」という方針は、大学の新しいスタイルとしてこれからますます期待が持てますね。

中村 SUACで学んだことはいろいろありますが、やはり「生活に密着したデザインやマネジメントをする」という考え方を植え付けてくれたことが、今仕事をしている上でも大きいですね。特に浜松は世界的な企業もたく



渡邊妙子
静岡文化芸術大学参与、
財団法人 佐野美術館館長

中村麻紀
財団法人佐野美術館 学芸グループ主任、
文化政策学部芸術文化学科卒(一期生)

実際の現場に触れた経験が、学芸員への道の後押しとなりました(中村)

さんあり、外国の方もたくさんいるので、日常生活という視点はもちろん、地域という視点でも物事を見ることができるようになりました。**渡邊** マネジメントという観点で言うと、日本人というのはあまり得意な分野ではないんです。職人として一人で物を作る、ということには長けているんですが、いろいろな人、いろいろな労力を集めてマネジメントすることが歴史的に見てもあまり得意ではない。だからこそ、日本の大学でマネジメントを教える意味と言いますか、その重要度はとても高いと思いますね。SUACは特に、学内での基盤的マネジメント研究だけでなく、地域の企業や行政と絡んで、実際に社会で生かされるようなプログラムも組んでいますよね。これはすごく大切なことで、先程の「美と生活を結びつける」を実現させるためにもなくてはならない教育方法だと思います。公立大学になっても、こういった社会システムと直結するプログラムはぜひ残していってほしいですね。

中村 私もそう思います。私が学芸員と言う仕事を目標として現実的に考え出したのは、さまざまな展覧会を見に行ったり、美術館で実習をさせていただいたり、実際の現場に触れた経験が後押しとなっています。中でも、学生時代に佐野美術館で美濃焼の貸し出し作業のお手伝いをさせてもらった時のことが印象に残っています。見るだけでなく、作品のもつ歴史や伝統が手を通して伝わってくるようで感動しました。「手で見る」というか、今まで経験したことのない新鮮な感覚を受けました。その時に「あ、これは講義では絶対にわからない」と実感しました。

◆ 大学と学生に期待する 今後の方針

渡邊 もうひとつ私がSUACに期待していることがあって、それは“ものづくりの土台”を大切にすることです。日本のものづくりというのは、自然界の素材の特性を生かすというのが一番の特色。例えば、漆器などはそのひとつです。自然界で漆の木はすごく少なくなっているし、漆器を作る工程に必要なヘラや刷毛を作る人たちもどんどん減少しています。こういったものづくりの素材について、ものづくりをする過程で細かな作業をする人たちについての必要性をもっと学生に教えていってほしいんです。世間的に注目されるのはどうしても最終的な製品を作る人たちですが、大学ではもっと総合的な視野に立った見方をカリキュラムとして取り入れてほしいと思います。

中村 私は、大学というより後輩たちに向けてのメッセージですが、とにかく「自分で考えること」を4年間大切にしていってほしいと思います。SUACに入学する学生は、何かしら将来やりたいことがある人たちだと思いますので、自分が一番やりたいこと、自分が思い描く芯の部分は絶対に忘れないでほしいですね。ビジョンさえブレなければ、講義にしてもサークル活動にしても、ゼミにしても「何が将来の自分に必要なのか？」がはっきりしてきて、能動的な学生生活が送れるはずです。私も入学当初から美術に関わる仕事への夢を描いていて、「その道は絶対に外れないぞ」という気持ちで4年間過ごして

きたつもりです。**渡邊** そうですね。未来への明確なビジョンとそれを実現されるための考える力。さらに私の考えを付け足すと、情報収集能力というのも学生に養ってもらいたい能力として重要視しています。情報収集と言うと今やネットが主流になっていますが、ネットを通じた情報というのは表面的なものが多いですね。だから、そこからもう一步突き詰めた、実物を含めた基礎資料などの情報を集める能力、そしてそれを文章にまとめる能力が、仕事をする上でも必要になってくると思います。図書館に行って資料を調べるとか、現場に行くと状況を確認めるとか、そういった時間をかけて集める情報のことですね。当然、ネットでの処理能力というのも現代では必要不可欠ですが、大学4年間について言えば、今申し上げたような「時間をかけてひとつのことをやり通す力」をもっと養っていただけたらと思います。そして、伝統や文化の知識を持ちつつ、つねに世界の最新情報や時代の世相に敏感に反応できる、一流のマネジメント能力を持った人材が、今後続々とSUACから誕生していくことを願っています。マネジメント能力については、私が学びたいくらいですけど(笑)。

浜松における
多文化共生の
未来
Multiculturalism
in Hamamatsu

展
望

テーマ 多文化共生

対談 池上重弘 (文化政策学部 国際文化学科長) / イシカワ エウニセ アケミ (文化政策学部准教授)

写真展の成功から見えてきた、多文化共生の未来。
大学と地域、学生と地域の人々、日本とブラジルの間で、「つなぐ」という役割を仕掛け続けていくことが、今後求められるSUACのビジョンだと言える。

外国人がいるのは当然という環境は、子どもたちの財産だと思います (池上)

写真展から広がった
ブラジル人との関わり

池上 この10年を振り返って真っ先に思い浮かべるのは、2008年(ブラジル移民100周年)に開催した写真展「ブラジルの中の日本、日本の中のブラジル ～写真で見る100年、過去から未来へ～」ですね。本学の学生約80名からなる実行委員会を立ち上げ、写真展をメインに、本学のブラジル人

学生と公立高に通うブラジル人高校生による座談会を開催するなど、とても有意義なイベントだったと思います。

イシカワ メディアにも大きく紹介されて大反響でしたよね。

池上 そうですね。日本人とブラジル人の学生が一緒になって主導し、成功に導いたというのは、多文化共生の視点から本当に価値のあるものでした。

イシカワ 日系ブラジル人から特に反響が

あったのは写真展期間中に開催したポルトガル語討論会。現在も調査結果報告と全体討論という形で継続的に行っていますが、これまでブラジル人同士が集まってポルトガル語で意見が言い合えるという機会ってなかなかなかったんですよ。だから、2008年の写真展をきっかけにそういう環境を作ることができたのはすごく大きかったですね。今では「調査報告より全体討論の時間を増やそうよ」という意見も多いくらいですから(笑)。



池上重弘
静岡文化芸術大学文化政策学部国際文化学科長。
研究分野:文化人類学、多文化共生論

イシカワ エウニセ アケミ
静岡文化芸術大学文化政策学部准教授。
研究分野:在日外国人、異文化関係、移民研究

2008年日伯移民100周年記念パネル写真展

「在日外国人」という言葉すら出てこない社会が理想的 (イシカワ)

池上 意識調査や実態調査なんかはこれまで数多く行われていますよね。でもその結果が、当事者である日系ブラジル人にほとんどフィードバックされていなかったというのが問題なんです。行政の政策立案のみに使われたり、研究者の間でしか公開されてなかった。ただ、私たちは浜松に住んでいるので、日系ブラジル人コミュニティのすぐ近くにいる。だからこそ「調査しました。はい、さようなら」ではなく、当事者に素早く、わかりやすくフィードバックしていきたいという気持ちが強いですよね。そのために、写真展のパンフレットやポルトガル語討論会の報告書なんかは日本語とポルトガル語の両方を記載しましたし、座談会の様子をDVD化して貸し出したりと、さまざまな切り口から、より手に取りやすいような工夫をしました。

イシカワ 日系ブラジル人たちがその結果をどう受け止め、どう考えるのかを間近で見ることができたし、さらに、そこで出てきた“生の声”を取り入れた提案を行政に対してできるようになりましたよね。

ども、地域のアクターたちを「つなぐ」役割を担っていたといえます。

イシカワ 多文化共生のベースとなる部分ですね。そういった「つなぐ」という役割の大切さをもっと学生たちに伝えていきたいですね。

池上 2年前からスタートした「日本語教員養成課程」にその要素が含まれています。多文化共生系の科目に日本語教育を取り入れたというのは画期的だと思いますよ。「浜松にいれば近く日本語を求めている人たちがいるよね。世界とつながるチャンネルって英語圏で英語を話すだけじゃないよね」という、浜松だからこそできる地域性を重視したスタンスが特長になっています。

イシカワ なるほど。当たり前だけど、周りの人たちと言葉を通じたコミュニケーションができなければ、共生なんて夢のまた夢ですからね。池上先生がおっしゃっていたことは逆になりますけど、今の日系ブラジル人の子たちってポルトガル語ができない子も結構いるんです。それでも、国籍はブラジルだし、周りからは「ブラジル人」だと認識される。私としては、日本語教育だけでなく、そういうポルトガル語を知らないブラジル人の子もたちが日本の社会でどう活躍していけばいいのかという部分も併せて研究していきたいですね。

池上 子どもたちの話が出たので付け加えますと、国際文化学科は圧倒的に女子学生が多いんです。私はこれがひとつ重要なことだと考えています。外国人に対する向き合い方とか文化の多様性に関する考え方って、小さい頃に親からすり込まれる部分

が大きいと思うんです。特に、お母さんから教えられる価値観の影響が強い。だから、本学で教育を受けた学生が将来子どもを育てる時に、多文化共生というオープンなスタンスを自分の子どもにしっかりと伝えていってほしいんです。私はそこにすぐ期待しているんですよ。次の多文化共生社会をスムーズに育てていくという意味でも。

イシカワ お母さんと子どもを「つなぐ」役割もあるわけですね。そういう意味でも、やはり浜松は最適な場所。「外国人がいて当たり前」という地域ですから。私はそこから発展して「あ、あそこでポルトガル語を話してる」とか、そういうのが全く気にならなくなる社会が多文化共生の第一歩かなと思っています。さらに20~30年先には「在日外国人」、「国際結婚」、「異文化交流」、さらに「日系ブラジル人」という言葉すらあまり出てこない社会というのが理想的ですね。

池上 私の子どもも、今大学1年生と高校2年生なんですけど、ずっと浜松で育ちました。だから、クラスメイトに外国人がいるのは当然という環境だったわけですね。そういう感覚ってというのは、浜松の人は不思議に感じないんだけど、他の地域から見ると「すごいね!」となる。これは浜松で産まれ育った子どもたちの財産だと思いますよ。普段の生活の中に、ごく自然に、ブラジルという大国とつながるチャンネルがたくさんある。これからはもっと浜松+ブラジルという組み合わせを“浜松のアドバンテージ”として発展させていけるような方針を全面に打ち出していくのもおもしろいかも知れませんね。

多文化共生というのは「つなぐ仕事」

池上 多文化共生の分野で私たちが担っているのは、わかりやすい言葉でいうと「つなぐ仕事」なんですよ。ブラジル人コミュニティと日本の行政をポルトガル語の討論会を通してつなぐ、日本の行政と外国人の実態を意識調査を通してつなぐ、もう少し実践的なところでいえば、私がコーディネーターとして関わったNPO団体の連携フォーラムな

デザイナーに
求められる
資質とは
Qualifications for
being a designer

榮久庵元デザイン学部長と宮内デザイン学部長の対談から
紡ぎ出す、デザイナーに必要な「発想力」と「着眼力」。
さらに今後、世界に羽ばたくデザイナー育成に必要な
デザイン教育とは。

展
望

テーマ **デザイン**

対談 元デザイン学部長 **榮久庵憲司** デザイン学部長 **宮内博実**



榮久庵先生がデザインした作品

ひとつのことをやりこんで始めて、その意味がわかる (榮久庵)

デザイン学部の
基本コンセプト

宮内 榮久庵先生はSUACのロゴマークを作られた方ですが、これにはどのような思いがあったのでしょうか？

榮久庵 デザインコンセプトは「青空のごとく爽やかに」です。青空っていうのは目に見えるものですが、でも無限に広がっている。そういう爽やかでいて、尚かつ可能性を秘めているというのは、学生には絶対に必要な性質じゃないかなと思って考えました。立体

になっているロゴという点でも、当時から珍しいシンボルでしたね。

宮内 SUACのデザイン学部3学科において、各々の基本的なコンセプトをどのように考えていらっしゃいましたか？

榮久庵 まず生産造形学科ですが、これは、俗に言う消費対象・一般生活ですから、当然必要だろう、と。そして、当時は建築を中心とした都市問題が注目されてきていましたので、空間造形学科も必要だろう、となりました。特殊だったのが、残りの技術造形学科(現メディア造形学科)ですね。これはまさ

にオリジナルで、「技術を造形化できないだろうか」という独自の考えで作った学科です。

科学という世界をどうやって人に知らしめるか、それに対してどうデザインを発揮できるかを追究する。大変難しいことではありますが、これからも、非常に意味のある学科だと思いますね。

宮内 その3つの学科に配置される先生方は、例えば、建築専門の方だけが空間造形学科に所属されるわけではなく、いろいろミックスされて配置されましたよね。

榮久庵 学科は3つありますが、教えること



榮久庵憲司
元静岡文化芸術大学デザイン学部長、
GKデザイングループ代表、国際インダストリアル
デザイン団体協議会(ICSID)名誉顧問

宮内博実
静岡文化芸術大学デザイン学部長。
研究分野:視覚デザイン学、色彩学、色彩心理学、
色彩計画論、カラーマーケティング論等

パソコンを使いながらも「なんとかみんなで作る」という工夫が必要 (宮内)

というのは究極的にはひとつなんですよ。それは、学生が「他にはないものを探す癖」を付けられるようにすること。力んで探すのではなく、探すことを癖にする。その癖は、将来的に本物になっていき、デザインに生きてきます。例えば、お花畑を見た時に「なぜ花が全部違うのか」、「空はなぜ青いのか」、「なぜ木々の葉は緑なのか」ということを感じられるような人材の育成です。学生たちにそういう体質になってもらうことが一番大事だと考えて、先生方の配置もジャンル関係なくミックスしたスタイルになったわけです。

ンベがあっても良いんじゃないかと思います。習熟して使いこなせれば、非常に意味がある道具ですからね。

宮内 以前、スタッフのみなさんがパソコンを見ていたときに「一人でパソコンを見るからダメなんだ。みんなで見なきゃダメなんだ」とおっしゃっていたのがとても印象的でした。やっぱりパソコンというのはパーソナルなものなので、どうしても一人よがりになってしまいます。だから、パソコンを使いながらも「なんとかみんなで作る」という工夫が必要ですよ。

榮久庵 一人だと単なるオタク族になっちゃいますからね(笑)。その通りです。共有すれば良いんですよ。おもしろいこと、新しいことを考えた時に「言いふらす癖」というのも必要だと思います。「どうだ! おもしろいのができたぞ!」みたいな。自分のアイデアを言いふらす癖、言いふらせるような環境を作ること大切かもしれません。

デザイン学部の新しいビジョン

宮内 オリジナリティや目の付け所が大事だということですね。ただ、最近ではコンピューターを道具として使い始めて、ソフトを使うことで満足してしまう。自分で考えることをしなくなってしまったという問題が出てきていると感じています。これについてはどう思われますか？

榮久庵 私も最近iPadを購入したのですが、使いこなすにはいろいろと教わらなければいけないですね。iPadにしても、iPhoneにしても、習熟することは良いことだと思っています。かつてはそれに変わるものがそろばんでした。みんなそろばん塾へ行ったり、そろばんに慣れるということは日本にとっても重要なことで、「そろばんがあったから明治ができた」と言われてるくらいですよ。現代では、そのそろばんに匹敵するのが、iPadやiPhone。コンピューターに関しても、ぜひとも習熟してもらいたいし、習熟度をはかるコ

す。英語十何かもうひとつ、最低三カ国語を使いこなせること。デザイナーは知的活動になるわけですから、語学習得はマストです。相手から信頼を得るといっても「言っていることがわかる」というのは強みですからね。これは、四年間を学生にどう過ごさせるかという大学当局にとって重要な問題ですよ。単位をどういう風に取りらせるか?ということだけでなく、環境をいかに作るかです。環境さえ整ってれば言葉は覚えますから。さらに、大学当局も学生も、「就職先は全世界だ」と考えて、グローバルな視野を持つこと。たとえ語学力が足りなくても、勇気を持って世界に入っていけばそこで覚えられます。浜松からロンドンに行っても良いし、パリに行っても良い。対象が当たり前のように「世界」となれば、語学力に対する考え方も「当然のもの」となっていくはずですよ。

宮内 なるほど。最後に、最近「デザイン」と言うと、表面を飾ることだという理解が多いように感じられて気になっているのですが、その点についてお話しください。

榮久庵 私も気にしております。大事なことは「形とはどのようなものか」を知ることなんですよ。それを知らないと、当然表面的になってしまいます。形そのものというのは、卵だろうが犬だろうが、天が与えられた形です。だから新しいメカニズムに新しい形を与えるということの意味、形の機能とは何なのか、形があることによってその存在が見える、ということを理解することが必要です。「形の本質的な意味」というのは、これから学生たちにしっかり伝えていかなければならないことかも知れませんね。

宮内 癖を付けられるような教育と環境作り。これはデザイン学部の新しいビジョンになるかも知れません。それでは、これからの10年に向けて、求められるデザイナー像を教えてください。

榮久庵 そうですね。まず、難しい問題に直面した時に逃げない、耐える力、忍耐力とすることが必要です。柔術が柔道になったように、茶術が茶道になったように、道というのは訓練の成果です。ひとつのことをやりこんで始めて、その意味がわかる。その訓練にひたむきに耐えることが非常に重要です。訓練に耐え、成果を上げる。これを成し遂げられた人が、世界的な信用を得てきています。そして、もうひとつ必要なのが語学力で

文化政策と 空間造形の 視点から見る 浜松のまちづくり

Designing Hamamatsu
through Cultural Policy and
Spatial Design lenses

地元・浜松の文化的、空間的特徴を踏まえながら、
浜松のまちづくりの可能性、今後の展開を探る。

テーマ まちづくり

文化政策学部文化政策学科長 **阿蘇裕矢** | デザイン学部教授 **寒竹伸一**

まちづくりというのは、自分のことだけ見ようとしてもうまくいかない(寒竹)



空間造形と 文化政策の接点

寒竹 空間造形学科の立場から私が一番
感じているのが「浜松は大きな海が近くに

るのに、身近な存在として感じられない」と
いう部分。山や川などもそうですが、自然が
もたらしてくれている資源と上手にお付き合い
していないという印象があります。

阿蘇 湖もあるし、気候も良いし、こんなに良

い街はないと思います。先日、浜名湖でヨッ
トに乗る機会がありましたが、市民が自然を
満喫している姿を見て感動しました。海、河
川、山と豊かな自然に恵まれて、まちの魅力
や価値を高める素材として活かさない手は
ないですね。

寒竹 海の問題もまさにそこです。目の前に
海辺がいっぱいあるのに、海で遊べる空間
というのがほとんどない。遠州灘が泳げない
海だと言うのはわかりますが、そういう中
でも「海と遊べる施設」というのはできておかし
くないと思うんですね。

阿蘇 文化政策の面からも同じように考えら
れます。文化政策学科と言うのは、一言で
言えば「生活者の視点」で地域のあり方を
研究するところ。地域の暮らしや生活を考
え、それを今後どのように良くしていくのかを
研究することなんです。だから、寒竹先生が
おっしゃった、海辺の活用についても「海を
市民の暮らしにどう役立てていくか」を考
えることも、文化政策の一つと考えます。つま
り、「生活文化」ですね。空間造形と文化政
策というのは接点が多そうですね。

寒竹 生活文化に対して「芸術文化」と言
う言葉があります。その一つとして、ファッ
ションが挙げられますよね。街中にファッショ



阿蘇裕矢
静岡文化芸術大学文化政策学部文化政策学科長。
研究分野:地域の風土と文化、人と自然の共生、地域づくり論

寒竹伸一
静岡文化芸術大学デザイン学部教授。
研究分野:建築設計、都市・ランドスケープデザイン

大学周辺構想

浜松は、街道筋の文化、豊かな資源に恵まれている。どのように活かすかが課題です(阿蘇)

ン性のある若者が溢れば、その街の印象
は華やかになって、活気のある印象を受け
るし、街の空間美の一翼を担う効果もありま
す。SUACにはデザイン系と文科系の学生
がいて、みんなファッションセンスが高い。こ
れは浜松の文化、街中の空間にとつてすご
く良い影響を与えていると思います。

阿蘇 浜松は昔から繊維産業も盛んな地域。
本学でも毎年7月7日の「ゆかたの日」に合
わせて「SUAC納涼祭」が行われています
ね。学内外問わず、地域の特色や歴史、文
化を知ることができるイベントに、学生がど
んどん参加していくことはすばらしいことだ
と思います。そして、そういった「地域とのふれ
あい」を築き上げてきたことが、この10年の
実績だと言えますね。

「浜松市」という 地域社会の特徴とは

寒竹 文化や地域との触れ合いという話が
でしたが、浜松は「文化が弱いのではない
か」「市民が閉鎖的ではないか」と言われま
す。大都市以外のまちの共通の属性でもあ
るのかもしれませんが、これについてはどう
お考えですか？

阿蘇 ひとつは、地域社会が大変よくできあ
がっていて地域の人たちのつながりが濃密
な一方、よそ者には馴染みにくいという印象
があるように思います。浜松は自治会の力が
他の都市より強いと思いますが、そういった
部分も関係しているのかもしれませんが。浜松
まつりを見ていると特にそう思いますね。そ
の分、なかなか地域社会に溶け込みにくい。

寒竹 なるほど。私が思うのは、浜松という
地域は良くも悪くも「恵まれ過ぎ」なんじゃな
いかと。気候は良いし、冬も凍え死ぬことも
ない。海の幸も山の幸も当たり前のように
採れるし、東京や大阪のように競争も激しく
なってしまう。そういった環境が、浜松人の
気質や浜松の文化などに反映されているん
じゃないかと考えています。

阿蘇 おっしゃる通りですね。よく言われるよ
うに挑戦する人を敬うという土地柄ですから、
お互いが良い意味で切磋琢磨するところ
で、研究熱心です。しかしながら、恵まれて
いるからこそその価値が見えにくいと言うか、
そういう部分が見受けられますね。その分、
本学の設立は、教員の大多数がいわばよそ
者。よそ者だから、浜松の価値や魅力がより
見えてくるってことがありますね。これが寒
竹先生のおっしゃった、良くも悪くもという
ところなんでしょうけど。

寒竹 浜松は物価が高いという印象がある
のですが、内輪のことだからか、そういうこと
に誰も疑問を持たないのか、文句言わない
ですよ。

阿蘇 なかなか面白い地域なんですよ。本
当に困っていれば「何とかしないと!」って
みんながんばるはずなんですけど、浜松は実
際そんなに困っていない(苦笑)。先ほどの資
源を活用するということも含めて、のびしろ
がいくらでもある街です。そういう点を考
え、この気質という文化・歴史というのは
ちょっともったいない気がしてきますよね。

寒竹 そうですね。だからこそSUACも、浜松
がもっと良く変わるための方法や可能性を

探して、行政や地域にもっと提案していかな
ければいけません。浜松は大都市と違って、
大学と行政、学生と地域の距離がすごく近
いですから、そういった面を上手に利用して、
人材育成や教育システムの構築をしていけ
たらと思います。

阿蘇 まちづくりとかデザインってというのは、
本来、機能的な部分を整備充実することで
したが、近年は、むしろ「まちの様相」が重視
される時代になったと思いますね。まちづく
りは、「こうすればこうなる」といった普遍的な
方程式があるわけではないんですね。あくま
で時代と地域の文脈の上で考えていく必要
があります。それが、個性や魅力となりま
すね。こういう認識ができる人材が今後必
要になってくると思いますね。

寒竹 そう思います。まちづくりというのは、自
分のことだけ見ようとしてもうまくいかない。
つまり、他者が必要であり、他の街を見て自
分の街を知ることが重要になってきます。
他者や他の地域を受け入れて、自分た
ちのこと、浜松のことをもっと知る努力が必要
です。そうすれば「浜松がどのように、豊か
であるか」ということに気付くと思います。そ
こで「豊かだからよし」で終わるのではなく、
「この豊かさを活用して進化するにはどうす
ればよいか」という考え方が出てくれば、今
後のまちづくりに文化政策、デザインの必要
性といったものがより自然に求められるま
ちになっていくのではと期待しています。



地元・浜松の大学として、 今後に寄せる期待

A local university
with aims for the future

浜松市長 鈴木康友

静岡文化芸術大学が創立10周年を迎えられましたことを心からお慶び申し上げます。

平成12年4月の開学以来、静岡県西部地域における学術・文化の振興拠点として、また、地域に開かれた大学として、学生の教育にとどまらず、本市の発展や都市づくりに多大なご貢献をいただきましたことに厚くお礼申し上げます。開学から10年の歴史の中で、平成16年4月には大学院の開設、平成22年4月には公立大学法人となるなど、地域の文化、芸術、学問の発展のため、大学の運営に尽力してこられた理事長、学長、教職員の皆さまに改めて敬意を表します。

貴大学は、静岡県、浜松市、地元経済界が協力して設立した大学として、各方面から大きな期待が寄せられているとともに、有為な人材を輩出する地域の知的な財産として、

浜松市民にとって掛け替えのないものとなっております。

さて、浜松市は広大な市域を有し、自然環境や伝統文化などに、地域ごとに優れた特色がある一方で、産業の振興、過疎化への対応など様々な課題を抱えています。また、近年、市民ニーズが多様化・高度化する中、少子・高齢化の進行など、本市における社会的な課題もより一層多様化しており、行政ですべての課題の解決に取り組むことは容易ではありません。

こうした中、本市では、地域の課題の解決に向け、自主的で行動力のあるひとづくり、多様な主体が活動しやすい環境づくり、さらに、これらの活動を有機的に結びつける取り組みなどを行っております。こうした本市のまちづくりに、専門的知識と深い教養を備えた教員の皆さまをはじめ、多くの学生の皆さんにご

参加いただくことも、重要なことと考えております。

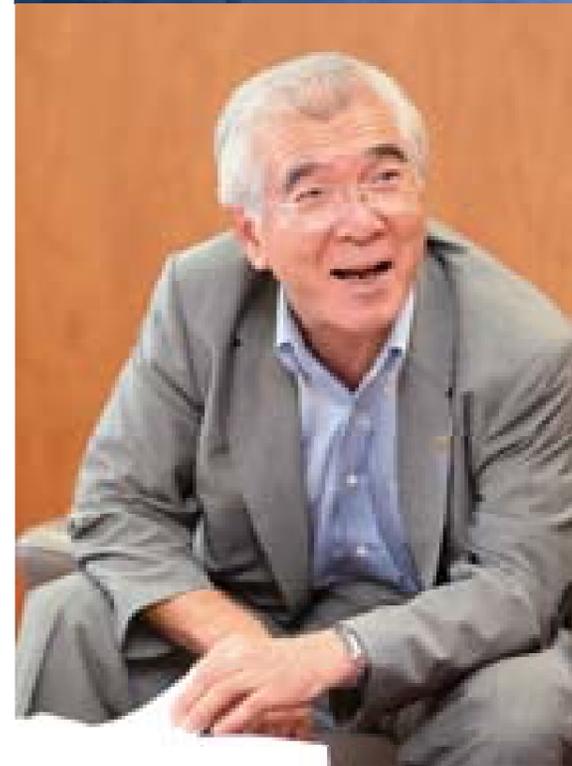
貴大学には、地元・浜松の大学として、豊かな地域社会の形成のため、次代を担う人材の育成はもとより、行政や地域との連携、他大学とのネットワークの形成等にも、これまで以上に取り組んでいただき、行政とは違った立場から、市民協働によるまちづくりにご協力いただくようお願い申し上げます。

結びに、記念すべき創立10周年を一つの節目として、貴大学の今後ますますのご発展と、関係者の皆さまのご健勝、ご活躍をお祈り申し上げます、お祝いの言葉とさせていただきます。

地域との 協働を目指して

〈浜松商工会議所会頭からの言葉〉

Regional
collaboration



Q.これまでの本学の活動に対する評価について、お聞かせ下さい。

21世紀の到来を控えた当時、浜松の都市力向上、都市機能の充実を図ることを目指し、国際化、情報化の進展にも柔軟に対応できる人材の育成拠点として期待されたのが、SUAC誕生の経緯でした。それから10年、この大学の存

地域産業界に蔓延する“閉塞感”。これを打ち破るためのキーワードは「若者」です。

御室健一郎

浜松商工会議所会頭、
静岡文化芸術大学経営審議会委員

在は、「デザイン」という観点で新たな付加価値を創造していくこと、あるいは、「文化政策」という観点から、地域の活性化を考えていくことなどを通じて、「ものづくりのまち」浜松に、地域振興や都市間競争を勝ち抜く上での重要なエッセンスを吹き込んでくれています。この地域に、生活に潤いを与える「文化」という新たな視点をもたらされた意義は、とても大きいと思います。

Q.今後の本学に対する期待について、お聞かせ下さい。

地域の持続的な発展を実現するためには、次々と若い人材を育成し、その能力を地域のために発揮していただくことが不可欠です。幸いなことに、SUACと企業との協働や地域振興への関わりは非常に強いと思っています。今後につきましても、SUACでの研究成果が地域企業の個々のビジネスに反映されたり、さらには、まちづくりに対して大きな波及効果をもたらされたという事例を積み重ねていくことを望んでいます。

現在の地域産業界にはまだまだ“閉塞感”が蔓延していますが、これを打ち破っていくキーワードのひとつが「若者」であると確信しています。学生たちの発想力、アイデア、行動力、ネットワークは、今後、企業が積極的に活用していく

べきものだと考えます。そして、高齢化社会が進む中で、世代間のギャップを生むのではなく、異なる世代がこれまで以上に接点を増やし、連携・融合していく中から、新しい価値観が創造されることを期待します。これは日本の未来、浜松の未来を語る上でも、とても重要なことです。さらに、SUACの学生、先生方に申し上げたいことは、「机の上だけで考えてはいけない」ということ。もちろん、書物を読み、インターネットで情報検索を行うことも大切ですが、それにも増して、できる限り現場に出かけていって、自分の目で見て、耳で聞いて、そして、多くの方々と直接会話をし、そして、ほしいと思っています。そうすることで、現代社会の中で「何が」「どのように」問題になっているのかに気付き、今後どのような視点で研究を進めていかなくてはならないかが明確に見えてくるはずで、常にアンテナを高く張り、実際に肌で感じ取った情報をもとに、今後に向けて、地方の大学としての特色や独自性のある教育内容、研究方針を構築して、ほしいと願っています。

地域との協働を目指して

〈浜松市中区長からの言葉〉

地域と積極的に
関わっていく活動は
SUACの特筆すべきところ

村田克弘

浜松市企画部次長兼企画課長を経て、
平成22年4月より浜松市中区長就任



Q.本学に対して、どのようなイメージや印象をお持ちでしょうか？

大学が街中にあること、地域にオープンであること、そして学生たちがどんどん街中に出て活動していること。この3点が、これまでのSUACを見てきて素晴らしいと感じた部分です。これは10年間と言う歴史の中で、少しずつ、着実に地域に認知されていますね。全国にも例がない「デザイン」と「文化政策」という2学部体制という特徴をしっかりと打ち出してきたことも成長要因のひとつと言えるでしょう。浜松は元々製造業の街ですが、その製造工程の中で、時代のニーズに沿ったデザインやアイデアを組み込んでいくことは、これからの主流になりつつあります。特にデザイン学部では開学当初から「ユニバーサルデザイン」に力を入れていますよね。こうした時代の先端をいく分野というのは、行政、企業としてもすぐ期待している部分ですので、これからますます発展させていってほしいですね。

浜松は昔から「文化が足りない地域」と言われ、生活の中に“遊び”の部分が多くなかなか根付いてこなかった地域です。そういった“遊び”の部分、つまり美術や芸術、文化の部分を学べる学校が浜松にあるということは、今後、地域の文化レベル向上のために必ず役立つと思っています。以前に拝見させていただいた、薪能は素晴らしいイベントでしたね。厳かな日本の伝統芸能を、大学というくぶんリラックスできる空間で堪能することができ、説明を受けることができる。地域住

民の方も大変楽しみにされているようですし、こうした地域密着型・参加型のイベントを大学主導で開催することは大変意義のあることだと思います。また、生涯学習という面から見ても、SUACは他の大学よりも社会人聴講生が多く、また、

て、知ってもらうことで、卒業後、他の地域に出ていくとしても、SUACで学んだ学生たちが浜松のPRをしてくれることを期待しています。また、これは大学全体に期待することですが、三遠南信エリアとの連携に力を入れてほしいと考えてい



先生方も周辺の小中学校に出向いて行き、さまざまな交流活動をされているということも聞いています。地域の施設、人と積極的に関わっていく活動、そして、それができる環境というのはSUACの特筆すべきところではないでしょうか。

◆
Q.今後の本学に対する期待についてお聞かせ下さい。

未来への展望としては、もっと全国様々な地方からの学生が浜松に来ていただき、SUACで勉強をしてもらいたいですね。浜松の良さ、すばらしさをいろいろ見

ます。浜松市も県の枠にとらわれない協力体制というのを、愛知県豊橋市を中心とした東三河地域や、長野県飯田市を中心とした南信州地域とともに進めています。特に東三河地域には、さまざまな分野の大学がありますので、そのようなところと連携し、学生を行き来させたり、先生同士の交流の場を設けたりするなど、広いエリアを視野に入れた活動、研究をしていってほしいと願っています。

SUACへの想い

在学生が語る
Student voices

それぞれの大学生活とそれぞれの夢・希望

SUAC在学生4名が語る、

次代のSUACに向けられた新鮮なメッセージ



石見彩香

デザイン学部
メディア造形学科4年

大学創立10周年記念品の
お茶パッケージをデザイン

杜陽丹

文化政策学部
文化政策学科2年

留学生／中国出身

石野太輔

デザイン学部
生産造形学科2年

第11回碧風祭(平成22年度)
運営委員長

川口知里

文化政策学部
文化政策学科4年

英国／ウェールズ大学
トリニティ・カレッジへ留学

Q.まずは、皆さんの本学への志望理由を教えてください。

石見 私はオープンキャンパスに参加したことが大きなきっかけです。古い固定観念に染まっていない新しい大学であるという印象を強く受けました。もともと新しい分野とか新しいことに挑戦するのが好きなので、SUACを見学に来たときに「ここなら充実した学生生活を送れそうだな」と感じました。学生も皆キラキラと輝いて映りました。

川口 新しい大学という部分には、私も惹かれました。校舎もキレイですから。そして、やはりカリキュラムですね。私が興味を抱いていた文化政策学科にも、心理学や経済学、観光学など、とても幅広い科目が盛り込まれていたのも、ここならいろいろなことを勉強しながら、自分が本当にやりたいことを見つけれられるのではないかと思います。

杜 私もオープンキャンパスに参加して、興味のある科目をたくさん学ぶことができるといったことが決め手になりました。それから、私と同じ中国人留学生としてSUACを卒

業した先輩から薦められたことも大きな理由の一つです。

石野 高校生当時、僕はまだ将来の夢とかは固まっていなかったのですが、昔から絵を描くのが好きだったので、漠然と「デザイン関係の大学に進みたい」と思っていました。そんな時、SUACの大学案内にパッケージデザインのことで見つけて、やってみようと思ったのが志望の理由です。

◆
Q.入学前にイメージしていた期待と、実際の学生生活はいかがですか？

杜 もちろん学問にしっかり取り組みたいと思っていましたが、友だち作りやサークル活動にも興味がありました。せっかく留学に来ているので、卒業後に悔いを残さないようにすることが目標ですね。この大学は規模は小さくても、その分“中身”が充実しているので学生生活はとても楽しいです。

川口 繰り返しになりますが、私は「いろいろな分野を勉強することで自分のやりたいことを見つける」というのが一つの目標でし

た。これまで4年間勉強してきた中で、観光学と社会学という自分に合った学問と出会うことができたので、入学前の目標は達成できました。そして、数多くの人との出会いも大きな財産です。サークル活動やイギリスへの海外留学など、多くの素敵な出会いに恵まれました。この大学に入って本当に良かったと思っています。

石野 デザイン学部に入ったので、デザインの勉強を頑張るのは当然ですが、それ以外に「もっと自分の可能性を広げるにはどうしたらいいか」ということを常に考えています。僕は今年、碧風祭(大学祭)の運営委員長を務めさせてもらっているのですが、もともと人前で話をするのが得意ではありません。しかし、運営委員長をやることで人前で話すことにも慣れるよう努力しています。また、デザイン学部の授業の中では、人前で自分の作品についてプレゼンテーションをする機会が多くあります。こうした経験を積むことで、自分の可能性が広がるのではないかと思います。



ズ大学と比べてしまうのですが、イギリスでは、例えば学生寮があり、常にそこに人が集まって来て騒いで……というような、大学や学生同士の一体感みたいなものがありました。それがSUACには薄いことが、少し寂しい気もします。

石見 私もそれは思いました。「大学はいろいろな地域から人が集まってくる場所」と思っていたのですが、SUACは学生の半分以上が静岡県出身のため、全体的に“静岡の色が強い”と感じます。もちろん、浜松の人はみんな活発だし、すごく元気が

S 在 学 生 が 語 る SUAC へ の 想 い

部の存在が個人的には良い面だと思います。デザイン学部と文化政策学部という一見すると全く異なる2学部と一緒に存在するところが、実はSUACの良いところではないかな。碧風祭の運営委員にも両学部の学生がいて、それぞれが自分の得意な分野で力を出し合って、お互い協力しながらやっていますよ。デザインが得意な学生は大学祭のポスターのデザインとか、ホームページのデザインをしていますし、地域交流の分野では文化政策の学生が企業回りをして協賛を集めています。

少々気になるところは、2学部しかないのに、お互いの学部が「どんな勉強してるのか良くは知らない」というところ。例えばデザイン学部の人が文化政策学部の科目を履修できたり、体験したり

杜 私は、これからさらに語学をマスターして、英語、日本語、中国語の3つの言葉を自在に話せるようになりたいです。大学を卒業した後は日本の会社に就職することが今の第一目標ですが、さらに将来は、日本と中国を結ぶビジネス活動ができるような人材になりたいですね。

川口 私はイギリス留学を経験して、英語がとても好きになって「英語を使った仕事がしたい」と考えていました。ホテル業界から就職の内定をいただくことができたので、これを「英語を使う仕事」の第一歩として頑張りたいと思っています。まずは働きながらもっと英語の力を伸ばして、いずれは海外で働きたいという夢があります。海外留学の経験は本当に私にとって貴重でした。なかなか踏み切れない人も多いと思いますが、外国や語学に関心のある人にはぜひおすすめしたいです。将来に対する自分の視野が絶対に広がると思います!

石見 SUACでいろいろなことを学んでいく中で「私はやはりグラフィックデザインが好き」ということに気がきました。就職活動もグラフィックデザインの分野を中心にいき、今は広告代理店のグラフィックデザイナーとして内定をいただくことができました。来年は胸を張って入社できるように、残りの学生生活一日一日を大事に過ごしていきたいと思っています。



石見 大学というのは、自分で自分を磨いていかないと成長できないし、それができないと時間の無駄になってしまいますね。私は高校時代から漠然と「デザインに関わりたいな」くらいにしか思っていませんでした。しかし、メディア造形学科に入って、デザインの様々な分野、デザインの基礎や専門的な技術に触れることで、自分の適性を自分自身で判断していくことができたかなと思っています。

Q. それでは次に、皆さんが考えるSUACの自慢できる点や改善すべき点について教えてください。

石見 私は高校でもデザインを学んでいたのですが、友だちにも美大に通っている子が多いのですが、SUACは単なる美大とは違います。デザイン学部だけでなく国際文化や文化政策などを学ぶ文化政策学部もあることにより、普通の美大に比べて、しっかりとした大学という印象があります。実は私は美大だと思って入学したのですが(笑)。

杜 中国の大学生に比べてみんな静かですね。中国の大学はとてにぎやかで活発な雰囲気があります。せっかく国際文化学科があるので、もっと留学生が増えてほしいと願っています。そうすれば自然と異文化交流にもつながると思いますから。また、デザイン学部と文化政策学部の交流がもっとあった方がよいと思います。

川口 SUACは地元出身の学生が多いので、「大学に集まる」とか「大学が中心」という意識や雰囲気が薄いと思います。留学していたイギリスのウェール

あることは良いことだと思います。それから、SUACでは、同じ学年同士の「横のつながり」は学部、学科を超えて比較的あるのですが、大学が創立10周年を迎えたこれからは、もっと先輩と後輩の「縦のつながり」を構築していくことが必要だと思います。

石野 碧風祭運営委員長の立場からみて、例えば他大学の大学祭パンフレットと比べるとSUACのパンフレットのデザインはクオリティが高いと感じますね。手前味噌ですが…(笑)この大学にとっては当然のことなのですが、デザイン学

するとか、そういうことをもっと取り入れてもいいかなと思います。

Q. わかりました。それでは皆さんのこれからのキャリア形成や目標などありましたら教えてください。

石野 僕の目標は、まずは碧風祭の成功です。学生一人ひとりが自分たちの手で作り上げる、アットホームな雰囲気の大学祭になれば良いと考えています。地元の企業や一般市民の皆さんも取り込んで、地域全体が盛り上がるようなイベントにしたいです。

10年の軌跡

Footprints from SUAC's ten years

平成7年 9月	静岡県議会で「新大学整備基本構想」を公表	11月	第1回碧風祭開催、SUACビール発売
平成8年 12月	校舎基本設計を発表	12月	ユニバーサルデザイン「共用品展」開催
平成9年 6月	大学名を「静岡文化芸術大学」と決定	平成13年 1月	「学長と話そう」を初開催
平成10年 3月	文部大臣より大学設立準備財団設立認可	2月	東京・銀座でグループ展「鼠ノ手(そのて)21」開催
平成11年 12月	文部大臣より学校法人設立及び大学設置認可	5月	学生と緑化研究会が「創造の丘」に草花の種をまいた
12月	石川嘉延知事が理事長に就任	5月	キャリア・オフィスを設置
12月	学校法人静岡文化芸術大学設立	8月	第1回(新世紀)メディアアートフェスティバル開催
平成12年 1月	入学試験開始	8月	「夏休み親子手作り工房」開催
3月	校舎竣工	8月	第1回SUAC展inアクト納涼まつり
4月	大学の開学・木村尚三郎学長 就任	10月	第1回静岡文化芸術大学特別公開講座「薪能」開講
4月	開学式、入学式	平成14年 11月	「産業考古学会」全国大会を本学にて開催
5月	浜松まつりで開学を祝う凧揚げ	平成15年 10月	天皇、皇后両陛下が本学をご視察
5月	大学公開デー「大学へ行こう!!」を開催	10月	わかふじ国体の式典を総合演出、炬火台をデザイン・制作
6月	県西部高等教育ネットワークへ参加	11月	文部科学大臣より大学院設置認可
7月	第1回文化芸術セミナー開催	平成16年 3月	第1回卒業研究・制作展開催
8月	第1回オープンキャンパス開催	3月	第1回卒業式を挙行
8月	第1回エクステンション(公開講座)、公開工房開催	4月	大学院(文化政策研究科、デザイン研究科)を開設
8月	「思っきりアートしよう」開催	4月	静岡大学情報学部との単位互換制度を開始(1月に調印式)
8月	「ミレニアム都市計画キャラバン・イン・浜松」開催	4月	浜名湖花博「もぐらのねぐら」出展
9月	シンポジウム「東西の笑いの交流」開催	6月	本学の校舎が第9回公共建築賞の優秀賞を受賞

6月	国際会議「音楽・芸術表現のための新インターフェース」を開催	6月	「日伊喜劇の祭典」を開催
7月	文化・芸術研究センターニュースレター「文化と芸術」発刊	6月	日本デザイン学会を本学にて開催
9月	図書館・情報センターだより「温故知新」発刊	6月	日本文化政策学会の設立総会を本学にて開催
9月	「WAZAフェスタ2004」を本学にて開催	平成20年 6月	静岡県議会で知事が平成22年4月「公立大学法人」への移行を公表
12月	「しずおかユニバーサルデザイン大会」を本学で開催	9月	ウェールズ大学トリニティカレッジ・カマーゼン(イギリス)と交流協定締結
平成17年 3月	第1回SUAC産学官連携フォーラム開催	10月	日伯移民百年記念パネル写真展開催
3月	湖西大学校(韓国)との交流協定を締結	11月	第5回静岡国際オペラコンクール開催(本学内に事務局設置)
8月	湖西大学校(韓国)との「国際大学交流セミナー」を開催	11月	しずおかユニバーサルデザイン国際シンポジウム開催(静岡県と共催)
10月	スマトラ震災報道写真展及びシンポジウムを開催	12月	県と県内6大学が防災に関する協定を締結
11月	「文化政策研究大会2005」を本学で開催	平成21年 4月	新カリキュラム「日本語教員養成課程」スタート
平成18年 4月	デザイン学部「技術造形学科」を「メディア造形学科」に改称	8月	浙江大学城市学院(中国)と交流協定を締結
5月	ミハエル・ゾーバ氏、ジェラルド・キャロン氏が招聘客員教授に就任	9月	川勝平太知事が理事長に就任
6月	高田和文教授がイタリア政府から騎士勲章を受章	10月	第24回国民文化祭シンポジウム・第3回県民オペラ「蝶々夫人」公演
8月	SUACデザインセミナーを初開催	10月	文化庁メディア芸術祭開催
10月	静岡文化芸術大学ユニバーサルデザイン国際セミナー開催	12月	しずおかユニバーサルデザインの絆in Hamamatsu開催(県、市と共催)
10月	木村尚三郎学長逝去	平成22年 1月	熊倉功夫学長 就任
平成19年 2月	上海工程技術大学(中国)と交流協定を締結	4月	大学の運営主体を学校法人から公立大学法人へ移行
3月	フィンドレー大学(アメリカ)と交流協定を締結	4月	有馬朗人理事長 就任
4月	川勝平太学長 就任	10月	大学創立10周年記念式典 挙行
4月	静岡国際オペラコンクール事務局を本学内に設置		



ふりかえれば未来
SUAC10

静岡文化芸術大学創立10周年記念誌

平成22年10月発行

編集：静岡文化芸術大学創立10周年記念誌編集委員会

発行：静岡文化芸術大学

〒430-8533 浜松市中区中央二丁目1番1号
